

張伯英『法帖提要』訓注稿(5)

澤田雅弘、浅野泰之、中村亜由視、入山征弘
青木 豊、澤岡雪子、松岡美佐希、賈 川
包 永勝、塩島敏子、栗 躍崇、大嶋英里

昨年度に続き、大学院書道学専攻博士課程前期課程の開設授業「中国書学演習」(澤田担当)のテキストとした張伯英『法帖提要』(筆写原稿。『続修四庫全書総目提要』所収)の内22項目を訓読し注を付したものである。ただし、原稿期日の関係から、本稿には昨年度に入稿しなかった1項目No.97を含む。原稿は、受講者それぞれが担当項目を整え、注を付したが、訓読については澤田が点検した。執筆者名は、各項末の()内に記した。なお、原稿の取りまとめには、入山、松岡が当たった。(澤田)

【No.97】

張文敏義莊¹帖五卷 華亭張氏本

清張照²書。乾隆六年勒成。一卷曰義莊碑記³。二卷曰義莊条例。三卷曰綸音及奏議。四卷五卷曰特恩誥命。全帖皆真楷。第二卷条例約五六千字。小楷尤精。張得天以書名雍乾間。梁聞山評為有清書家第一⁴。其書以曲阜孔氏⁵玉虹樓帖⁶中所刻最多。而義莊所刻。全部真楷。大小畢備。尤為經意之作。自跋云⁷。明賢每書誥辭勒石。董宗伯仿顏平原例自書之⁸。流傳至今。照擬書刻義莊久矣。自碑記条例勒成後。王事日益鞅掌。旋寫旋輟。得一二紙。門下生輒又取去。乾隆辛酉。省覲歸里。長夏杜門。因畢此願。較之思翁。誠所謂古今人不相及也。得天自以其書不敢比香光。而聞山謂出其上⁹。似非篤論。然清代學董書者。皆不之及。義莊条例。仿范氏成法。完密周至。期垂永久。今不知何如。清高宗題董臨蘭亭詩¹⁰。謂此張照所藏。照沒其子流蕩。盡鬻之。若不勝太息者。此義莊条例言遇子孫之賢者可以增加。不肖亦不至墮壞。果能爾乎。但有得天此書。其義莊亦可不朽。鐫搨既精。裝潢工美。猶乾隆時旧製。良足珍也。

清の張照の書。乾隆六年(1741)勒成す。一卷は義莊碑記と曰う。二卷は義莊条例と曰う。三卷は綸音及び奏議と曰う。四卷五卷は特恩誥命と曰う。全帖は皆な真楷。第二卷の条例約五六千字にして小楷は尤も精なり。張得天書を以て雍乾(雍正、乾隆)の間に名あり。梁聞山(嶽 1710~1785)評して有清の書家の第一と為す。その書は曲阜の孔氏の玉虹樓帖中に刻する所を以て最も多しとす。而して義莊の刻する所は全部真楷にして、大小畢く備わり、尤も經意の作為り。自跋に云う「明賢は毎に誥辭を書し勒石す。董宗伯(其昌 1555~1636)顏平原(真卿 709~785)の例に仿いて自ら之を書し、流傳して今に至る。照(張照)書して義莊に刻さんと擬(ほつ)すること久し。碑記条例勒成してより後、王事日に益ます鞅掌。旋に写し旋に輟め、一二紙を得。門下生輒ち又た取りて去る。乾隆辛酉(1741)、省覲もて里に帰り、長夏門を杜ぞす。因りて此の願いを畢う。之を思翁(董其昌)に較ぶれば、誠は所謂古今の人相い及ばざるなり。」と。得天(張照)自ら其の書を以て敢へて香光(董其昌)と比べず。而して聞山(梁嶽)其の上に出づと謂うは、篤論に非ざるに似る。然るに清代の董書を学ぶ者は皆な之に及ばず。義莊条例は范(仲淹 989~1052)氏の成法に仿い、完密周至にして永久に垂るるを期す。今何如なるやを知らず。清の高宗 董臨蘭亭詩に題して、此れ張照の所藏と謂う。照没して其の子流蕩し、尽く之を鬻ぐ。太息に勝えざる者の若し。此の義莊条例に「子孫の賢者に遇いて以て増加すべし。不肖も亦た墮壞するに至らざれ。」と言う。果たして能

く爾るか。但だ得天の此の書有りて、其の義莊も亦た不朽なるべきのみ。鐫搨は既に精なり。装潢は工美。猶お乾隆時の旧製のごとし。良に珍とするに足るなり。

[注]

- 1 張文敏義莊：董士錫撰『齊仏論齋文集』卷3「国子監生晁君墓志銘」、石韞玉撰『独学廬詩文稿4稿』「張氏義莊記」にみえる。
- 2 張照：1691～1745。字は得天、号は天瓶、涇南、諡を文敏という。江蘇省松江の人。康熙48年の進(1709)士で累進して刑部尚書に至った。帖学の大家。『天瓶齋書画題跋』の著があり、『石渠宝笈』の編纂にもかかわった。
- 3 義莊碑記：『瀛海仙班帖10卷』第8卷所収。
- 4 梁聞山評為有清書家第一：『承晋齋積聞録』「名人書法論」に「張得天学字無多家数、少年学董、老年学米、遂成大家、並無与抗行者。」また「汪士宏…我朝自張得天外、無与抗行者。」さらに『評書帖』に「得天天分高、魄力雄。」また「張得天書早年学董、中晚年学米、遂成一代大家。」とみえる。
- 5 孔氏：孔繼涑。1726～1790。字は信夫、号は谷園。山東省曲阜の人。乾隆23年(1758)の挙人。張照に師事しその娘を妻とした。碑帖の鑑識にすぐれ、多くの集帖を刻した。
- 6 玉虹樓帖：張照の書が多く刻されている。『評書帖』に「玉虹樓中年書也、刻手亦不佳。」とみえる。
- 7 自跋云：『天瓶齋書画題跋』の「書先祖封公告身恭紀」に「…明賢每書酷辭勒石。董宗伯則仿顔平原之例自書之。流传至今。照擬書刻義莊久矣。而自碑記条例二種勒成後。王事日以益鞅掌。旋写旋輟。得一二紙。門下生輒又取去迄於無成。乾隆辛酉三月給假。省覲帰里。長夏杜(在)門。大人於鑪煙藥裏中尋翰墨為娛。因畢此願。較之思翁書。誠所謂(為)古今人不相及也。…」とある。11か所に文字の異同省略あり。
- 8 董宗伯仿顔平原例自書之：『自書告身帖』に董其昌の跋文がある。
- 9 聞山謂出其上：『評書帖』に「董元宰、張得天直接書統、卓然大家。元宰魄力弱於得天。」とみえる。
- 10 清高宗題董臨蘭亭詩：『高宗御製詩文集』未収。

(浅野泰之)

【No.98】

秋声賦¹一卷 袖珍本

明董其昌書。題云万曆二十一年歳在癸巳七月望日。帖二十一葉。每葉三行。行七字。梁承祖²跋云。香光小楷。石刻頗多。然皆帶行体。罕有如此工者。雖左規右矩。而勢若飛動。足為学者模範。梁不知為何人。此帖筆法。不似香光。當是張照之書。得天学董。有極肖者。而筆法不同。香光作書。用力純在空際。得天未能也。此其所臨董帖。去款識以充董書。得者不之弁。取以刻石。二家不同處顯然易見。香光書有密有疏。得天書有密無疏。因於院体³濡染太深。難於脱化。梁聞山以為優於香光⁴。非確論也。古人書画精進。多在晚歳。香光七旬後作。乃臻絕詣。劉石庵於董帖。最称家藏帖汲古堂帖⁵。皆其晚年之筆。得天之没五旬余耳。其天資之優。用力之勤。若假以年。所詣当不止此。而終不能与董抗者。殆天有以限之。觀此賦。則董張異同自見。特非淺識所能知耳。

明の董其昌の書。題に云う「万曆二十一年(1593 董31歳) 歳は癸巳に在る七月望日。」と。帖は二十一葉、每葉三行、行ごとに七字。梁承祖の跋に云う、「香光(董其昌)の小楷は、石刻頗る多し。然れども皆な行体を帯ぶ。此の如く工なる者有ること罕れなり。左は規 右は矩と雖も、而れども勢は飛動するが若く、学ぶ者の模範と為すに足る。梁は何人為るやを知らず。此の帖の筆法は、香光に似ず。当に是れ張照(1691～1745)の書なるべし。得天は董を学びて、極めて肖る者有るも、而れども筆法は同じからず。香光の作せる書は、用力 純ら空際に在るも、得天(張照)は未だ能わざるなり。此れは其の董帖を臨する所。款識を去りて以て董書に充て、得る者之を

弁せず、取りて以て石に刻せしなり。二家の同じからざる處は顯然として見易し。香光の書は密有り疏有り。得天の書は密有るも疏無きは、院体に於て濡染すること太だ深く、脱化し難きに因る。梁聞山(巖)て香光よりも優ると為すは、確論に非ざるなり。古人の書画の精進は、多く晩歳に在り。香光の七旬後の作は、乃ち絶詣に臻る。劉石庵(塘 1720? ~1804?)は董帖に於て、最も家藏帖、汲古堂帖を称う。皆な其の晩年の筆なり。得天の没するは五旬余なるのみ。其の天資の優れるは、用力の勤なり。若し仮すに年を以てせば、詣る所当に此に止まらざるべし。而れども終に董と抗する能わざるは、殆ど天以て之を限る有り。此の賦を觀れば、則ち董、張の異同自ら見ゆ。特だ淺識の能く知る所に非ざるのみ。

[注]

- 1 秋声賦：恐らく歐陽脩の賦。董其昌『容台集』卷1及び2の秋声賦に「…歐陽公乃於宋王之外別構一奇、雖陳言尽去、而典則森然。良繇深於六經。」云々とある。管見では董書の秋声賦を見ず、多くは趙孟頫書である。既刊の董其昌年譜の類にも見えない。ただ、高士奇『江村書畫目』の列目中、「明董文敏真迹 文恪公跋 康熙四十四年六月揀定」の14後に「楷書月賦秋賦一冊 自補 自跋 真而精」が挙げられているのが、董書の可能性を残すが、詳細は不明。
- 2 梁承祖：未詳
- 3 院体：官場を中心に行われた実務性を反映する書流で、貶意を含むことが多い。唐、宋では院体、明では台閣体、清では館閣体の呼称が一般的。張照は清代館閣体を代表する一人。なお、1772年(乾隆37)の四庫館開設以降、その定型化が加速した。
- 4 梁聞山以為優於香光：梁巖(1726~84)『承晉齋積聞錄』名人法書に「(張得天書皆勁健…張得天書較董文敏健勁。)(胡東來得董華亭其昌所書桂尊酬帝子)…余旧有張得天臨華亭書、豪邁蒼勁、縱橫莫當、真有劍掣弩張之勢。謂之突過華亭、董公亦首肯。」とあるが、同文は未検出。なお梁の生歿年については、張朝陽「梁巖生卒考」(『書法』2010-6)に拠った。
- 5 劉石庵…最称家藏帖汲古堂帖：劉塘がこの両帖を称えたことは、『法帖提要』汲古堂帖にも「汲古堂帖六卷。…為董氏自刻帖五種之一。香光自跋在辛未(崇禎4年 1631)、香光七十有七、則此帖晚年筆也。劉石庵於董書最賞此刻及董氏家藏帖、以為罕觀。是在百余年前已不易得。…」とみえるが、劉塘のこの賛辞の典拠は未検。ただ家藏帖については、端方『壬寅銷夏錄』唐尉遲乙僧刷色天王象卷「劉石庵墨蹟冊(二十二開每開高八寸二分寬四寸六分行書)」中に、劉が董書の「雪柏霜松不記年、從教千尺鬱參天…」を臨書した作があり、その自跋に「香光詩帖、刻董氏家藏帖中、凡四卷。其余山詩一卷、全作小行、殆所云行楷者。吳儂學之、恐非香光所首肯耳。」とある。汲古堂帖への劉の言及は未検。なお、(董氏)家藏帖については、錢泳『履園叢話』卷9(碑帖)「明刻」に汲古堂帖とともに帖名が見えるが、詳細不明で、『法帖提要』や容庚『叢帖目』にも採らない。

(澤田雅弘)

【No.99】

趙王孫七種一卷 吳興劉氏本

清劉恕¹輯。首題元魏國公²松雪道人趙王孫法書七種。篆書十五字。作鉄線体³。每字高四寸許。頗秀健。不知誰氏書。摹勒亦未著年月。一蘭亭十三跋⁴。二陰符經⁵。三紈扇賦⁶。四道場山詩⁷。五撫州永安禪院僧堂記⁸。六尺牘五通⁹。原題七種。此六種。其石有損缺。抑以蘭亭及跋為二。殊不可知。恕。字蓉峰。道光時為蘇之收藏家。且喜刻石。然頗不弁真偽。其所刻帖真贋混淆。此趙書尚無偽者。十三跋与快雪本同。墨跡当在其家。後有葛正笏¹⁰題。引明賢上下三百年。縱橫一万里。¹¹之語為評。推崇甚至。然与紈扇賦。道場山詩皆非松雪精作。尺牘尤遜。惟陰符小楷及永安禪院僧堂記二種為全帖之冠。陰符有文嘉。王稚登跋。及王元美所藏。松雪晚年筆也。書家於晚年精進。以此与少作相比。則高出甚多。僧堂記在前。故筆稍稚耳。

清の劉恕の輯。首に「元魏国公松雪道人(趙孟頫 1254~1322)趙王孫法書七種」と題す。篆書十五字、鉄線体を作す。字毎に高さ四寸許り。頗る秀健。誰氏の書なるかを知らず。摹勒亦た年月を著さず。一は蘭亭十三跋。二は陰符経。三は紈扇賦。四は道場山詩。五は撫州永安禅院僧堂記。六は尺牘五通。原題は七種なるも、此れは六首。其の石損缺有り。抑そも蘭亭及び跋を以て二と為すか、殊に知るべからず。恕は、字は蓉峯。道光(清 1821~50)の時 蘇州)の収蔵家為りて、且つ刻石を喜ぶ。然れども頗る真偽を弁ぜず、其の刻する所の帖は真贋混淆す。此の趙書は尚お偽なる者無し。十三跋は快雪本と同じ。墨跡は当に其の家在るべし。後に葛正笏の題有り。明賢の「上下三百年、縦横一万里」の語を引きて評と為す。推崇甚だ至る。然れども紈扇賦、道場山詩は皆な松雪の精作に非ず。尺牘は尤も遜る。惟だ陰符の小楷及び永安禅院僧堂記二種は全帖の冠為り。陰符に文嘉(休承 1501~83)、王稚登(伯穀 1535~1612)の跋有り。乃ち王元美(世貞 1526~90)の所蔵。松雪晩年の筆なり。書家は晩年に於て精進す。此れを以て少作と相比ぶれば、則ち高く出づるもの甚だ多し。僧堂記は前に在り。故に筆稍や稚なるのみ。

[注]

- 1 劉恕：1759~1816。字は行之。蓉峰は号。他に寒碧主人、花歩散人などがある。江蘇蘇州の人。
- 2 魏国公：趙孟頫が歿後追封された栄爵。
- 3 鉄線体：小篆の一種。鉄線体の代表に唐の李陽冰の「謙卦碑」がある。
- 4 蘭亭十三跋：1310年に趙孟頫が独孤長老から得た定武本蘭亭に書き綴った13種の跋文。
- 5 陰符経：道教經典のひとつ。
- 6 紈扇賦：元の大徳9年(1305)の書。『松雪齋集』巻1所収。
- 7 道場山詩：蘇軾の「与客遊道場山何山詩」。道場山は浙江省湖州市にある。
- 8 撫州永安禅院僧堂記：『石渠寶笈』第3巻に「元趙孟頫書撫州永安禅院僧堂記一冊」とある。
- 9 尺牘五通：未詳。
- 10 葛正笏：字は摺書。崑山の人。『皇清書史31巻』に詳伝が見える。乾隆35年(1775)に葛正笏が撰集した『聚仁堂法帖』8巻には、巻6に蘭亭十三跋、陰符経、紈扇賦、道場山頂七古並跋、巻7に撫州永安禅院僧堂記がある。
- 11 上下三百年。縦横一万里：『佩文書画譜』元趙孟頫書勉学賦に「昔胡汲仲謂松雪之書、上下三百年、縦横一万里。拳無此書不虛耳。隆慶丁卯春三月朔日、文嘉。」とある。

(中村亜由視)

【No.100】

続人帖¹一卷 魏塘金氏本

清金以誠²輯。咸豊戊午勒成。以誠。字香圃。前有目録。為香圃手書。曰人帖続刻。王海日一札。王文成一札。趙忠毅三札。楊忠烈三札。左忠毅³一札。繆文貞一札。高忠憲二札。文文肅三札。史忠正一札。嘉慶時 鉄梅庵⁴曾鐫人帖四卷⁵。其石為金香圃收得。以其所蔵明賢手札続鐫。自題云。麟鳳拳矣。遺其毛角。宝於圭璋。俛舌曳心。忠言藥口。人帖云者。兩坤參乾⁶。此劉戡山之人譜⁷。必核其実。非馬扶風之忠經⁸。虚綴其名也。兵燹之後。兩刻皆損泐。唐蕉庵令吳県時搜訪得其殘石。補鐫完具。嵌石於平江書院⁹。趙忠毅書有云。孟子称浩然之氣。不可一息令餒。此吾人命脈。非特籍之以有為也。足下誠不得志。天下人誰為得志者。今之相国家宰。亦絶不得志耳。高忠憲書有云。弟以東林¹⁰為世側目。近正論漸明。山林人飽飡熟寝。無有偵迹之者。聖朝之恩沢也。若復出仕。不智甚矣。在弟晚局。只堅守東林。作一老頭巾。是本等事。是最勝事。越此一步。皆妄矣。讀此、見賢者有為有守。足以廉頑立懦。豈徒較書法工拙。然即以書法論。亦高出流俗遠矣。

清の金以誠の輯、咸豊戊午(8年 1858)の勒成。以誠は、字は香圃。前に目録有り。香圃の手書と為す。曰く「人帖続刻」と。王海日一札。王文成(守仁 1472~1528)一札。趙忠毅(南星 1550~1627)三札。楊忠烈(漣 1572~1625)三札。左忠毅(光斗 1575~1625)一札。繆文貞(昌期 1562~1626)一札。高忠憲(景逸 1562~1626)二札。文文肅(震孟 1574~1636)三札。史忠正(可法 1601~1645)一札。嘉慶の時 鉄梅庵曾て人帖四卷を鑄す。其の石 金香圃の取得と為る。其の所蔵の明賢手札を以て続鑄す。自ら題して云う、「麟鳳 拳がりて、其の毛角を遺す。圭璋よりも宝なり。佞舌は心を曳き、忠言は口に藁(にか)し。人帖と云う者は、両坤參乾 此れ劉戡山(宗周 1578~1645)の人譜の必ず其の実を核するなり。馬扶風(融 79~166)の忠経の虚しく其の名を綴るに非ざるなり。」と。兵燹の後に両刻 皆な損溺す。唐蕉庵(翰題 1816~1875)呉県に令たる時 搜訪し其の残石を得。補鑄完具し、石を平江書院に嵌む。趙忠毅の書に云う有り。「孟子は浩然の氣。一息して餒えしむべからずと称す。此れ吾人の命脈は特だにこれに籍りて以て為す有るのみに非ざるなり。足下 誠に志を得ずんば、天下の人は誰か志を得る者と為すや。今の相国 冢宰は亦た絶えて志を得ざるのみ。」と。高忠憲の書に云う有り。「弟 東林を以て世に側目せらる。近こる正論漸く明るし。山林の人 飽飡熟寝して、之を偵跡する者有る無きは、聖朝の恩沢なり。復た出仕するが若きは、不智なること甚だし。弟に在りては晩局只だ東林を堅守し、一老頭巾と作るのみ。是れ本等の事、是れ最勝の事。此の一步を越ゆれば、皆な妄なり。」と。此れを読めば、賢者に為す有り守る有りて、以て頑を廉くし儒きを立つるに足るを見る。豈に徒だに書法の工拙を較ぶるのみならんや。然れども即ち書法を以て論ずれば、亦た高く流俗を出づること速し。

[注]

- 1 続人帖：『叢帖目 2』所収。序文も所収。
- 2 金以誠：嘉善の人。『光緒秦興県志』巻第17(秩官志第二、仕績列伝)に伝あり。「襟江書院記」の撰者。
- 3 楊忠烈、左忠毅：天啓4年(1624)、魏忠賢の二十四大罪を上疏して宦官たちの恨みを買ひ、翌年、魏忠賢に誣告され逮捕されて獄に入れられた後、拷問を受け歿した。
- 4 鉄梅庵：鉄保。1752~1824。満州正黄旗の人。字は冶亭、梅庵は号。乾隆37年の進士。礼部、吏部尚書など要職を歴任。八旗中屈指の能書。
- 5 人帖四卷：『叢帖目 2』所収。
- 6 両坤參乾：參天兩地ともいう。陰陽思想から發した。ものごとの安定が得られ、調和がはかられるという感覚による。
- 7 人譜：首に太極図を挙げ、次に過格、改過説がある。古人の嘉言善行を集めたもの。
- 8 忠経：中国の経書の一つ。忠孝の道、忠道を概説した經典。
- 9 平江書院：乾隆27年(1762)知府の李永書が平江学舎と六門義学とを統合した書院。
- 10 東林：東林党。明の顧憲成と高攀龍(忠憲)とを主盟とする政治団体。

(入山征弘)

【No.101】

敦教堂法帖十卷 遼陽官氏本

清官文¹刻。官文。字秀峰。此其重摹淳化法帖。每卷前列真書積文。後有一等果威伯官太保大学士等印。積文為江西鄧師韓²書。鑄字者山陰陳明礼³也。卷首標題下各有臣王著模⁴四字。此刻原本未知始自何時。度不過康雍間。前此無有也。不識帖者目為宋搨。殊可笑。淳化法帖為王著輯摹。宋人相伝之説。帖中本無王著名。作偽者妄増此四字。以欺庸目及無学之人。得者遂矜為独有之奇。謂即宋代官帖。其实重翻明刻耳。秀峰於帖無所知。信幕友之称讚。以為至宝。覓工摹鑄。比原本更形嫩稚。後有跋云。此帖在官中堂邸第。甚不易得。与宋搨不爽銖黍。允属文苑奇珍。仲材⁵其慎守之。曹九成⁶記。曹与仲材莫知為誰。総之。皆茫然於帖之真偽者。鄧師韓字仰山。

所鈔積文沿訛襲謬。無所發明。其書亦當時俗體。凡不知書之人。刻帖傳世。未有不可笑者。帖每板為一葉。卷數。葉數記載詳明。裝訂成冊。不須裁截。冊面刻帖目及籤。皆工整。惜帖無足觀。充插架之物可耳。

清の官文の刻。官文、字は秀峰。此れ其の重摹の淳化法帖。每卷 前に真書の積文を列ね、後に「一等果威伯宮太保大學士」等の印有り。積文は江西の鄧師韓の書為り、鐫字は山陰の陳明礼なり。卷首の標題の下 各おの「臣王著摸」の四字有り。此の刻の原本 未だ何時より始まるやを知らざるも、度るに康(熙)雍(正)間を過ぎず、此れより前に有る無きなり。帖を識らざる者 目して宋搨と為すは、殊に笑うべし。淳化法帖は王著の輯摹と為すは、宋人の相伝の説なり。帖中 本より王著の名は無く、作偽する者 妄りに此の四字を増やし、以て庸目及び無学の人を欺く。得る者 遂に矜りて独有の奇と為し、即ち宋代の官帖と謂う。其の實 明刻を重翻するのみ。秀峰帖に於ては知る所無く、幕友の称讚を信じて、以て至宝と為し、工を覓め摹鑄せしむるも、原本に比べて更に形は嫩稚。後に跋有りて云う、「此の帖 官中堂の邸第に在り、甚だ得易からず、宋搨と銖黍を爽わず、允に文苑の奇珍に属す。仲材 其れ慎みて之を守れ。曹九成記す。」と。曹と仲材とは誰為るやを知る莫し。之を総ぶるに、皆な帖の真偽に茫然たる者なり。鄧師韓は字は仰山、鈔す所の積文 訛に沿い謬を襲ね、發明する所無し。其の書 亦た当時の俗體。凡そ書を知らざるの人、刻帖の世に伝わるもの、未だ笑うべからざる者有らず。帖は每板一葉を為し、卷數、葉數は記載は詳明、装訂し冊を成すに、裁截を須いず。冊面に刻せし帖目 及び籤は、皆な工整なれども、惜しむらくは帖は觀るに足る無く、挿架の物を充たして可なるのみ。

[注]

- 1 官文：1798～1871。満州正白旗の人。王佳氏。湖広総督など要職を務め、曾国藩とともに太平天国の乱を鎮圧した。咸豊10年(1860)に文淵閣大學士を拝し、同治3年(1864)に一等果威伯を封ぜられる。
- 2 鄧師韓：未詳。
- 3 陳明礼：未詳。
- 4 王著：？～990。字は知微、成都の人。同時代の黄伯思(1079～1118。字は長睿、雲林子と号す。)の『法帖刊誤』では、王著が淳化閣帖の編纂に関わったとするが、閣帖成立の淳化3年(992)以前の淳化元年(990)に王著は歿している。なお、卷頭の題記の下に「臣王著摸」の四字を刻した帖に明代の王文肅本があるが、他本にはなく特例である。
- 5 仲材：未詳。
- 6 曹九成：未詳。

(青木 豊)

【No.102】

箬溪書院¹記 長興県本

清梁同書書²。長興之箬溪書院。創自羽神宗³朝。在子山之陽。懷宗⁴十年。復有增葺。清嘉慶時。華亭袁秉直⁵知長興。以書院歲久荒蕪。自損廉俸重修。其地環山帶湖。饒有勝概。梁山舟為之記。宋後多有書院之設。清代尤盛。雖窮僻下邑。莫不有之。大都山水清幽。遠塵市之塵囂。及改建學校。有因其旧址者。有永歸廢棄者。凡距市較遠之處。則謂不便學童也。如徐州雲龍書院⁶。西臨石狗湖⁷。山欠一面。為東坡旧游地⁸。有石若響。多宋元古刻。松柏森森。皆數百年物。乃地方無学之輩。濫竊教育之柄。遂一挙而破壞之。樹木斬伐淨尽。齋舍悉行拆毀。石刻無所保護。於是名勝之地變為瓦礫之場。父老經行其處。為之慨然太息。莫可如何。其物之成虧有數。抑人為之不臧耶。山舟作此記。具言袁氏經營之善。苦心孤詣。為地方栽培人才計。今時過境遷。閱此文者徒增感喟。然山舟之書無恙。則謂箬溪書院。雖至今存可也。

清の梁同書(山舟 1723~1815)の書。長興の箬溪書院は、明の神宗朝(万曆)より創まり、子山の陽に在り。懷宗(崇禎)の十年(1637)、復た増葺する有り。清の嘉慶の時、華亭の袁秉直 長興に知たり、書院 歳久しく荒蕪するを以て、自ら廉俸を損(あた)えて重修す。其の地 山を環らし湖を帯び、饒かに勝概有り。梁山舟之が記を為る。宋の後 多く書院の設くる有り。清代 尤も盛んなり。窮僻の下邑と雖も、之れ有らざるは莫し。大都 山水の清幽あり、塵市の塵囂を遠ざく。改めて学校を建つるに及んでは、其の旧址に因る者有り、永く廃棄に帰する者有り。凡そ市を距つること較や遠きの処は、則ち学童に便ならずと謂うなり。徐州の雲龍書院の如きは、西は石狗湖に臨み、山一面を欠くのみ、東坡の旧游地為り。石の礫の若き有り、宋元の古刻多し、松柏森森として、皆な数百年の物。乃ち地方の無学の輩、濫りに教育の柄を窃み、遂に一举して之を破壊す。樹木斬伐して淨尽す。齋舎悉く拆毀を行い、石刻 保護する所無し。是に於て名勝の地変りて瓦礫の場と為る。父老 其の処に経行すれば、之れが為に慨然として太息す。如何ともすべき莫し、其れ物の成虧に数有りや、抑そも人為の臧(よ)からずや。山舟 此の記を作り、具に袁氏の経営の善を言う。苦心 孤り詣り、地方の人才を栽培するの計を為す。今 時過ぎ境遷りて、此の文を閲る者は徒だ感喟を増すのみ。然れども山舟の書 恙無ければ、則ち箬溪書院、今に至りて存すと雖も可なりと謂う。

[注]

- 1 箬溪書院：『浙江省長興県志』(嘉慶10年刊)巻4の学校に「箬溪書院在金蓮塢院之右。子山之陽邑治良方也。万曆三十四年、知県熊明遇…」と記す。
- 2 梁同書書：梁同書の撰并書の書院記は、『浙江省長興県志』(嘉慶10年刊)巻4学校に収録される。『北京図書館蔵歴代石刻拓本匯編』未収。
- 3 神宗：万曆帝(1563~1620)の廟号。諱は翊鈞。明の第14代皇帝。
- 4 懷宗：崇禎帝(1611~1644)の清による廟号。諱は由檢。明の第17代、最後の皇帝。
- 5 袁秉直：生歿年不詳。江蘇省華亭の人。長興県の知県(長興令)となったのは、『浙江省長興県志』(嘉慶10年刊)巻4学校に乾隆53年と見える。
- 6 雲龍書院：四庫全書本『江西通志』巻21に「雲龍書院、在武寧県脩江東。明万曆間、知県陳子侃建。中有講堂号舎凡四十間。後因水没、知県朱士佳遷建西門。」と記す。
- 7 石狗湖：徐州城の西南部に位置する雲龍湖の別称。
- 8 為東坡旧游地。：徐州太宗、如黄樓、快哉亭、放鶴亭、東坡石床、提蘇などが今に残る。

(澤岡雪子)

【No.103】

五経菁華一卷 吳県潘氏本

清楊沂孫篆書。光緒戊寅摹勒。自題云。髯丈同年以旧宣五丈許。属篆写五経訓詞。為幼穉小学之助。僕以過於矜慎。未敢遽写。度架幾帀歲矣。戊寅秋日。復遣載醇酒西尊來問。爰令侍婢界格。以重九日写竟。草舎偃仄。孩童喧擾。難於靜壑。故多錯誤。而体態拘窘。不称雅懷。良負多旨矣。所篆易五則。書二則。詩二篇。左伝四則。礼記五則。髯丈者。潘遵祁¹也。遵祁為奕雋之子²。号髯圃。籤題五経菁華四字。即髯圃書。書体頗似其父。濠叟篆書。宗法石鼓。有安雅之度。深於小学。故能周規折矩。超異庸俗。経文十余則。当為遵祁選撰。皆日用尋常之事。可為学者法守。惟世祿之家一段³乃偽古文。不应与真経並列。孫虔礼論書。以神怡務閑為一合⁴。濠叟云。孩童喧擾。是神未能怡也。夫務閑一事。神怡又為一事。務閑時多。神怡時少。擾吾神者孩童喧囂。事之至小者耳。濠叟晚年。大乱⁵已平。海宇寧謐。宦成帰里⁶。日從事於翰墨。以娛暮景。乃不易得之遭逢。觀此書。有余慕矣。

清の楊沂孫(1813～1881)の篆書。光緒戊寅(1878)の摹勒。自ら題して云う、「髯丈同年 旧宣五丈許りを以て、篆もて五經訓詞を写して、幼稚の小学の助と為さんことを属す。僕 矜慎に過ぐるを以て、未だ敢て遽かに写さず。架に度くこと市歳に幾し。戊寅の秋日、復た兩尊の醇酒を載せ來問せしむ。爰に侍婢をして界格せしめ、重九日を以て写し竟る。草舎は偏仄にして、孩童 喧擾したれば、静壺に難し、故に錯誤多し。体態は拘窘、雅懷に称わず、良に多旨に負く。」と。篆する所は『易』五則、『書』二則、『詩』二篇、『左伝』四則、『礼記』五則。髯丈は、潘遵祁なり。遵祁は奕雋の子為り、号は髯圃。籤題の「五經菁華」の四字は即ち髯圃の書。書体は頗る其の父に似る。濠叟の篆書は石鼓を宗法とす。安雅の度有り、小学に深し、故に能く周規折矩し、庸俗に超異す。經文の十余則は、当に遵祁の選択と為すべし。皆な日用尋常の事、学ぶ者の法守と為すべし。惟だ世禄の家的一段は乃ち偽古文なれば、応に真經と並列すべからず。孫虔礼(過庭 648 ? ～703 ?)の論書に、神怡び務閑なるを以て一合と為す。濠叟云う、「孩童喧擾す」と。是れ神未だ怡ぶ能わざるなり。夫れ務閑なるは一事、神怡ぶは又た一事と為す。務閑なるの時は多きも、神怡ぶの時に少なし。吾が神を擾す者の孩童の喧囂は事の至小の者なるのみ。濠叟の晩年は、大乱已に平らぎ、海宇は寧謐。宦成り里に帰り、日に翰墨に従事して以て暮景を娛しむは、乃ち得易からざるの遭逢なり。此の書を觀れば、余慕有り。

[注]

- 1 潘遵祁：1808～1892。清代の書画家。呉県の人、字は覚夫、順之。号は西圃、簡縁退士。
- 2 為奕雋之子：潘奕雋(1740～1830)は、字は守愚。号は榕皋、水雲漫士、三松老人。著に『三松堂集』がある。奕雋の子というは、孫の誤り。
- 3 世禄之家一段：『尚書』の偽古文畢命に、「我聞、曰世禄之家、鮮克由礼、以蕩陵德、実悖天道…」とある。
- 4 以神怡務閑為一合：神怡とは安らいでいる様、務閑とは仕事などで忙しくない様。「神怡務閑」は、孫過庭の『書譜』に五合(五つの好条件)、五乖(五つの悪条件)を説くなかの五合の一つ。
- 5 大乱：太平天国の乱(1851～1864)を指す。
- 6 宦成帰里：『清史稿』に、「道光二十三年举人、官安徽鳳陽知府。父憂帰、遂不出。」とある。父楊希鈺は同治4年(1865)11月6日の歿。

(松岡美佐希)

【No.104】

詩夢齋墨刻三卷 長白葉氏本

清成邸¹書。仏尼音布²以所蔵真跡勒石。光緒壬寅題云。詒晋齋書法。如鳳芝龍朮³。世間不可多觀。此冊尤得晋唐神髓。戊戌春月。敬為双鉤一通。命高生少洪⁴刻之樂石。以垂永遠。後庚子大難⁵。原石失去数十字。幸原本尚存。鉤模補刻。以成完璧。洵可喜也。首卷帰去來辭。次卷景福殿賦⁶。下卷唐宋元人詩句。成邸書刻者多。此帖雖無他刻完備。然皆精作。詩句為書聯用者。大小不等。更有自然之趣。往於潢肆⁷曾見四冊。各体具有。未經上石。其間自道学書經歷及執筆法尤詳盡。書雖一芸。非多見古人書跡。深知門徑。未有能成家者。郷曲⁸之士。非無資稟優異。留意書学。乃或誤歧途。或見聞寡陋。鮮底於成。成邸多蔵古人名跡。兼賢師友指導。致力於書有年。方得卓然有所成就。清代諸王。留心翰墨者多。無能及者。今声價視前清略遜。然其書自可伝。不繫乎一時顯晦也。

清の成邸の書。仏尼音布 蔵する所の真跡を以て勒石す。光緒壬寅(29年 1902)題して云う、「詒晋齋の書法は鳳芝龍朮の如く、世間多觀すべからず。此の冊は尤も晋唐の神髓を得。戊戌(24年 1898)春月、敬して双鉤一通を為り、高生少洪に命じて、之を樂石に刻せしめ、以て永遠に垂らす。」と。後 庚子(26年 1900)の大難に、原石 数十字を失去す、幸いに原本は尚お存したれば、鉤模し補刻して、以て完璧を成す。洵に喜ぶべきなり。首卷は帰

去来辞、次卷は景福殿賦、下卷は唐宋人の詩句。成邸の書は刻する者多し。此の帖は他刻の完備無しと雖も、然れども皆な精作りなり。詩句は聯を書するの用を為す。大小は等しからず、更に自然の趣あり。往 漢肆に於て、曾て四冊を見る。各体具有するも、未だ上石するを経ず。其の間 自ら学書経歴及び執筆法を道うこと尤も詳なり。書は一芸と雖も、多く古人の書跡を見、深く門徑を知るに非ざれば、未だ能く家を成す者有らず。郷曲の士、資稟優異なる無きに非ざれば、意を書学に留むれども、乃ち或いは歧途に誤り、或いは見聞寡陋にして、成るに底ること鮮し。成邸 古人の名迹を蔵すること多く、兼ねて賢師友 指導し、力を書に致すこと有年にして、方めて卓然として成就する所有るを得。清代の諸王、心を翰墨に留むる者多きも、能く及ぶ者無し。今 声価は前清に視ぶれば略ぼ遜る、然れども其の書は自ら伝うべし、一時の顕晦に繋わらざるなり。

[注]

- 1 成邸：永理(1752～1823)。字は鏡泉、号は詒晋齋主人。詒晋齋は晋の陸機『平復帖』を宝蔵したことにちなむ。清高宗乾隆の十一子。成親王に封ぜられる。
- 2 仏尼音布：葉詩夢(1863～1937)。字は鶴伏、号は師孟、葉赫那拉氏。慈禧太后の侄、清末の著名な琴家、書法を善くし、収蔵に富んだ。著に『詩夢齋琴譜』『詩夢齋詩文集』がある。
- 3 鳳芝龍朮：鳳芝は靈芝、龍朮は多年生の薬用植物。
- 4 高生少洪：未詳。『石刻刻工研究』未収。
- 5 庚子大難：1900年に起った義和団の乱を指す。
- 6 景福殿賦：作者は曹魏の何晏。
- 7 漢肆：町の露天市場。
- 8 郷曲：貧しくわびしい、片田舎。

(賈 川)

【No.105】

梅雪軒杜詩帖四卷 明西安朱氏本

明朱敬鑑¹書。敬鑑。字進父。号志川。陝藩の裔。分書題首日梅雪軒書杜詩。尾云万曆辛亥季男誼澗摹勒上石。所書古体詩二卷。近体詩二卷。皆行草。趙璧。張翔。張文。卜楨四人。各刻一卷。筆意与松雪相近。明代書家之於松雪。猶清代書家之於香光。罕出其範圍者。以志川之詣力。雖當時書名煊赫者無以遠過。而論書鮮有称及。得名固有幸不幸歟。明宗室多工書画。漢陽車氏集螢照堂帖²。謂宗室諸王多精翰墨。而遺跡不易得。其中亦無志川之書。惟朱之赤彙存明人書跡³中有其一葉。而書不逮此。亦未曾上石。此刻草書之稍大者尤見筆力。生長富貴之家。以書自娛。不事声色狗馬之好。其人已賢於庸衆。况筆墨精妙。卓然可伝者乎。明藩刻帖。如東書堂⁴。宝賢堂⁵。遵訓閣⁶以及益府⁷。皆有重摹古人法書。見称於後世。若自刻所書。只有此種。鑄揚精美。装池已三百年。至可宝愛。当与清代之詒晋齋相頡頏也。

明の朱敬鑑(1573～1620)の書。敬鑑は、字は進父、号は志川、陝藩の裔。分書もて首に題して「梅雪軒書杜詩」と曰う。尾に「万曆辛亥(39年 1611)季男誼澗摹勒上石す。」と云う。書する所の古体詩二卷、近体詩二卷は、皆な行草。趙璧、張翔、張文、卜楨の四人は、各おの一卷を刻し、筆意は松雪と相近し。明代の書家の松雪に於けるは、猶お清代の書家の香光に於けるがごとく、其の範圍を出づる者罕れなり。志川の詣力を以てすれば、当時の書名の煊赫たる者と雖も以て遠く過ぐる無く、而して書を論じては称及する有るは鮮なし。名を得るは固より幸不幸有るか。明の宗室 書画に工みなるもの多し。漢陽の車氏は螢照堂帖を集め、「明の宗室の諸王は多く翰墨に精しきも、而れども遺跡は得易からず」と謂う。其の中にも亦た志川の書無し。惟だ朱之赤の彙存せし明人の書跡中に其の一葉有り。而れども書は此れに逮ばず、亦た末だ曾て上石せず。此の刻の草書の稍や大なる者は

尤も筆力を見る。富貴の家に生長し、書を以て自ら娛しみ、声色狗馬の好みを事とせず。其の人已に庸衆よりも賢なり、況や筆墨は精妙にして、卓然として伝ふべき者をや。明藩の刻帖の、東書堂、宝賢堂、遵訓閣より以て益府に及ぶが如きは、皆な古人の法書を重摹して、後世に称えらるる有るも、自ら書する所を刻するが若きは、只だ此の種有るのみ。鑄搨は精美、装池して已に三百年、宝愛すべきに至る。当に清代の詒晋齋と相い顔頰すべきなり。

[注]

- 1 朱敬鑑：万曆中に奉國中尉となった。室名は梅雪軒。後文に「陝藩之裔」とあるとおり、太祖の第二子棧の八世の孫。朱棧は洪武3年に秦愍王に封ぜられ、11年に藩王となった。
- 2 漢陽車氏集蛩照堂帖：『蛩照堂帖』は『叢帖目 3』に康熙32年邵陽の車万育の撰集とある。車胤の末裔は堂号をすべて「蛩照堂」あるいは「囊蛩堂」と名づけた。車万育(1632～1705)は字は双亭、号は敏州、云崔。湖南邵陽の人。漢陽は邵陽の誤記か。
- 3 朱之赤彙存明人書跡：朱之赤『朱臥庵藏書画目』に見えない。
- 4 東書堂：明太祖朱元璋の第五子朱橚の長子周憲王の『東書堂法帖』。
- 5 宝賢堂：明代晉府の世子朱奇源の『宝賢堂帖』。
- 6 遵訓閣：万曆年間、憲王朱紳堯は家伝の宋本『淳化閣帖』を摹刻し、その遺志を継いだ朱識鋹によって完成し、肅王府東書園の遵訓閣に収蔵したいわゆる肅王府本で、遵訓閣帖、蘭州本とも称される。
- 7 益府：朱震寰か。未詳。

(包 永勝)

【No.106】

趙魏公書画一卷¹ 無錫尤氏本

明尤茂先²得松雪小楷赤壁賦。前絵東坡像。属文休承臨摹勒石。茂先。字叔野。尤文簡公之裔。世承家学。博雅好古。同游皆一時名士。此賦為松雪書之最小者。遠非金丹四百字³可比。題者文彭。文嘉。彭年。俞允文。周天球。張之象。王穀祥。黃姬水。陸師道。王問並茂先自題為十一家。皆小楷書。与松雪原蹟相等。東坡像用李龍眠⁴白描之法。不作濃髭。与他所伝坡像不同。洵精作也。刻者梁元寿⁵。明代文氏擅長書画。兼善鉤勒⁶。此賦出文休承手。故字若蠅頭。而筆法轉折輕重莫不曲尽其妙。休承題云。松雪小字。如玉枕蘭亭。補陀巖碑。玄元十子像⁶俱佳刻。十子像多剥損。補陀巖已不伝。惟蘭亭尚在。乃是真行。此楷字。当是趙蹟第一。原本既精。題跋皆東吳名筆。聚於一冊。深可宝貴。石已不知存否。明代所搨。微有漫者。猶未損及筆画耳。張玄超曰。尤君結廬九龍之陽山中。既扁以第二泉字⁸。復刻此置諸山房。表著往哲。為功匪淺。生清晏之日。為翰墨之娛。閱此為神往矣。

明の尤茂先 松雪の小楷赤壁賦を得、前に東坡像を絵き、文休承(嘉 1501～1583)に臨摹勒石を属す。茂先は、字は叔野。尤文簡(表 1127～1194)公の裔。世よ家学を承け、博雅好古。同游は皆な一時の名士。此の賦は松雪の書の最小なる者と為す。遠く金丹四百字の比すべきに非ず。題する者は文彭(1497～1573)、文嘉、彭年(1505～1566)、俞允文(1521～1579)、周天球(1514～1595)、張之象(1507～1587)、王穀祥(1501～1568)、黃姬水(1509～1574)、陸師道(1512～1580)、王問(1497～1576)並びに茂先の自題、十一家と為す。皆な小楷の書。松雪の原蹟と相い等し。東坡像は李龍眠の白描の法を用う。濃髭を乍らず。他の伝うる所の東坡像と同じからず。洵に精作なり。刻者は梁元寿。明代の文氏は擅まに書画に長じ、兼ねて鉤勒を善くす。此の賦は文休承の手に出づ。故に字は蠅頭の若し。而ども筆法轉折輕重は曲さに其の妙を尽せざるは莫し。休承題して云う、「松雪の小字は、玉枕蘭亭 補陀巖碑 玄元十子像の如きは俱に佳刻たり。」と。十子像は剥損多く、補陀巖は已に伝わらず。惟だ蘭

亭のみ尚お在す。乃ち是れ真行。此れは楷字なれば、当に是れ趙蹟の第一たるべし。原本は既に精、題跋は皆な東吳の名筆にして、一冊に聚まる。深く宝貴すべし。石已に存否を知らず。明代の搨する所は、微かに漫るる者有れども、猶お未だ損は筆画に及ばざるのみ。張玄超(之象)曰く、「尤君 廬を九龍の陽の山中に結ぶ。既に扁するに第二泉の字を以てす。復た此れを刻し諸を山房に置き、往哲を表著す。功を為すこと浅きに匪ず。清晏の日に生まれ、翰墨の娛しみを為す。此を閱せば神往と為す。」と。

[注]

- 1 趙魏公書画一卷：「餐霞閣法帖五卷」(『叢帖目 2』)「青華齋趙帖二十卷」(『叢帖目 4』)に所収。「青華齋趙帖二十卷」に鮮于樞、虞集、董其昌の跋が加わる。また、文嘉の『鈴山堂書画記』にはこの帖なし。
- 2 尤茂先：詳細不明。『無錫金匱縣志』には「明尤茂先別野、其堂日遂初。蓋取文簡旧額…」とある。『明代伝記叢刊索引』『明代三十三種伝記総合引得』等に名なし。
- 3 金丹四百字：張伯端(987～1082)の撰。顧麟士の『過雲樓続書画記』に「趙文敏小楷金丹四百字卷」とある。「采真館法帖四卷統刻二卷」(『叢帖目 2』)所収には、董其昌、陳繼儒、董恆の跋ありと記される。他に『南陽書画表』『秘殿珠琳』にあるほか、「金書金丹訣」と記されるものが『鈴山堂書画記』『諸家藏書簿』にある。
- 4 李龍眠：李公麟(1049～1106)。字は伯時。号は竜眠居士。安徽舒城の人。『東坡統集』卷19に「請奉議郎李公麟敬…」とあり、蘇軾と交流が知られる。
- 5 梁元寿：『石刻刻工研究』によれば、その刻に嘉靖36年(1577)8月の『蘇州府学義田記』、隆慶3年(1569)4月15日の『王節婦項安人祠記』がある。
- 6 兼善鈎勒：「停雲館帖」を文彭とともに摹勒している。
- 7 玉枕蘭亭 補陀巖碑 玄元十子像：玉枕蘭亭は「玉枕蘭亭序並趙松雪二跋及自跋(『玉虹樓法帖十二卷』第10卷所収)。玄元十子像は『正統道藏』玉訣類に「玄元十子図一卷」があり、「至元二十三年(1287)元日吳興趙孟頫記」とある。補陀巖碑は未詳。
- 8 第二泉字：江蘇省無錫惠山の天下第二泉にある趙孟頫書の石刻のことか。「天下第二泉」の拓本は国家図書館にある。

(塩島敏子)

【No.107】

松雪赤壁賦二卷 松江府署本

元趙孟頫書。旧只赤壁前賦。清乾隆元年。中州汪德馨¹。字一庵守松江。為構廊而嵌之壁。嘉慶乙卯²。南豊趙宜喜³。字鑑堂為郡守。購得後賦及坡公笠屐像。癸亥⁴。趙升常鎮道⁵。留石署中。与前賦並伝。二人均有題跋。光緒元年。知府江夏楊永杰⁶。字卓庵者題云松雪所書赤壁賦向置壁間。兵燹後⁷顛倒失次。不堪卒読。余下車之始。即搏搦而扨拭之。幸無残缺。仍嵌於壁而繞以廊。冀久遠焉。坡公像。董香光書贊。陳眉公題詩。趙鑑堂作記。二賦非同時之刻。亦非同時之書。後賦気体高華。神清骨峻。前賦筆勢偏側。結字亦俗。頗疑前賦偽也。松雪偽書最多。亦最不易弁。前賦凡学趙書皆能之。後賦則非庸手可弁。雖二刻同在一処。書之大小亦相似。而品格高下相懸不可以道里計。使趙書均如後賦又何譏焉。劉石庵有趙書墨蹟。以贈英煦齋⁸。經訓堂帖⁹刻之。石庵以為趙書第一。若此赤壁後賦。有過之無不及也。

元の趙孟頫(1254～1322)の書、旧くは只だ赤壁前賦のみ。清の乾隆元年(1736)、中州の汪德馨、字は一庵 松江に守たりしとき、構廊を為りて之れを壁に嵌む。嘉慶乙卯、南豊の趙宜喜、字は鑑堂 郡守と為りしとき、後賦及び坡公笠屐像を購得し、癸亥、趙は常鎮道に升り、石を署中に留め、前賦と並びに伝う。二人均しく題跋有り。光緒元年(1875)、知府の江夏の楊永杰、字は卓庵なる者 題して云う、「松雪書する所の赤壁賦 向に壁間に

置き、兵燹の後に顛倒し次を失い、卒読するに堪えず。余 下車の始め、即ち擗擦して之れを払拭するに、幸いに残缺無し。仍ち壁に嵌めて繞らすに廊を以てす。冀わくは久遠ならんことを。」と。坡公像は、董香光(其昌 1555~1636)賛を書し、陳眉公(繼儒 1558~1639)詩を題し、趙鑑堂 記を作る。二賦は同時の刻に非ず、亦た同時の書に非ず。後賦は気体高華、神清骨峻、前賦の筆勢は偏側、結字亦た俗、頗る前賦の偽を疑うなり。松雪の偽書最も多く、亦た最も弁じ易からず。前賦は凡そ趙書を学ぶ者は皆な之れを能くするも、後賦は則ち庸手の弁ずべきに非ず。二刻同じく一処に在り、書の大小亦た相似ると雖も、而れども品格高下の相懸るは道里を以て計るべからず。使し趙書均しく後賦の如くんば、又た何をか譏らん。劉石庵 趙書の墨蹟を有し、以て英煦齋に贈る。經訓堂帖 之れを刻す。石庵以て趙書の第一と為す。此の赤壁後賦の若きは、之れに過ぐる有るも及ばざる無きなり。

[注]

- 1 中州汪德馨：中州は今の河南省。楊錫跋『四知堂文集』(嘉慶11年刊)「復江安糧道書」に「広東臬司汪德馨…」とあるほかは、未詳。
- 2 嘉慶乙卯：嘉慶に乙卯なし。乾隆末年(60年 1795)乙卯か。
- 3 南豊趙宜喜：南豊は江西省東部、撫州市南部。趙翼『瓠北集』卷49「題趙鑑堂觀察小照」注に「君從松江守擢常鎮道、此冊多松江士民送行作」とある。
- 4 癸亥：嘉慶8年(1803)。
- 5 常鎮道：常は常州か。鎮は鎮江か。道は道台、官名である。常州、鎮江の道台であろう。
- 6 江夏楊永杰：張文虎『舒芸室詩存』卷7「孔雀為楊卓庵太守永杰詠」、『舒芸室詩存』乙編卷上「送楊卓庵太守離任序」に「…楊侯守我郡十年…」とある。
- 7 兵燹：太平天国の兵乱をいう。
- 8 英煦齋：英和(1771~1840)。清の宗室。姓は索綽絡氏、煦齋、粵溪生、樹琴と号した。書はことに趙孟頫を學んで秀麗である。ちなみに、自蔵の趙孟頫の書を刊刻した『松雪齋法書』嘉慶14年(1809)がある。
- 9 經訓堂帖：集帖12卷。畢沅撰集、錢泳、孔千秋鐫刻。乾隆54年(1789)刻成。王羲之より董其昌にいたる65種を畢沅自蔵から刻入したもの。錢泳『履園叢話』雜記には、かれ30歳の摹勒で極めて精刻という。

(栗 躍崇)

【No.108】

鄧文原¹急就章一卷 旧搨本

元鄧文原書。無刻石年月。款云大德三年三月十日為理仲雍²書於大都慶壽寺僧房。鄧氏伝書尚多。惟章草僅見此種。秦漢人小学書。如蒼頡爰歷博學凡將之属皆佚。独史游³急就至今存者。以昔賢喜書其文故也。唐顏籙為注⁴時。尚有皇象⁵鍾繇衛夫人王会稽諸本。至宋黃伯思⁶所見惟張芝索靖二家。芝書只存數行。靖書存三之二。均唐人鈎填。今則皆不可見。惟玉煙堂⁷及松江宋克補書⁸之兩殘刻。相伝以為皇象展轉摹翻。形模略具而已。戲鴻堂徐鉉⁹所書。摘摹十余行。未刻全文。至可惜。文全者三希堂趙書¹⁰及此鄧書。皆非徐鉉之匹。鄧書又非松雪之匹。独首尾完具。可為習章草者参考之助耳。昔黃伯思為蘇頌道¹¹書急就章及出師頌。自題云¹²筆迹雖愧昔人。然不知魏晉以先書法者。幸勿示之。其語頗自負。若鄧書實未見有漢晉人法。惟字体略異今草。伯思書今亦無伝。此欠數行。乃紙損非石泐。至石存何處。亦不之知矣。

元の鄧文原の書。刻石の年月無し。款に云う「大德三年(1299)三月十日、理仲雍の為に大都の慶壽寺の僧房に書す。」と。鄧氏の伝書は尚お多きも、惟だ章草は僅かに此の種を見るのみ。秦漢人の小学書は、蒼頡、爰歷、博學、凡將の属の如きは皆な佚し、独り史游の急就のみ今に至りて存するは、昔賢喜び其の文を書するを以ての故

なり。唐の顔籀 注を為りし時、尚お皇象、鍾繇(151～230)、衛夫人(鑠 272～349)、王会稽(羲之 307 ?～365 ?)の諸本有り。宋の黄伯思の見る所に至りては、惟だ張芝(生歿年未詳)、索靖(239～303)の二家のみ。芝書は只だ数行を存し、靖書は三の二を存するのみ。均しく唐人の鈎填は、今は則ち皆な見るべからず。惟だ玉煙堂及び松江の宋克の補書の両残刻、相い伝えて以て皇象と為し、展転摹翻せられて、形模略ぼ具わるのみ。戲鴻堂の徐鉉の書する所は、十余行を摘摹するのみにして、未だ全文を刻さず。至って惜しむべし。文の全き者は三希堂の趙(孟頫 1254～1322)書及び此の鄧書なるも、皆な徐鉉の匹に非ず。鄧書は又た松雪の匹に非ず。独り首尾完具したれば、章草を習う者の参考の助と為すべきのみ。昔 黄伯思、蘇頌道の為に急就章及び出師頌を書し、自ら題して云う、「筆迹は昔人に愧ずと雖も、然れども魏晉以先の書法を知らざる者は、幸いに之を示すこと勿かれ。」と。其の語頗る自負す。鄧書の若きは実は未だ漢晋人の法有るを見ず。惟だ字体は略ぼ今草に異なるのみ。伯思の書は今亦た伝うるもの無し。此れ数行を欠くは、乃ち紙損にして、石泐に非ず。石何れの処に存するかに至りては、亦た之を知らず。

[注]

- 1 鄧文原：1259～1328。字は善之。号は巴西、匪石。諡は文肅。綿州の人。博学で書にすぐれ、楷行草とも二王を典範とし、のちに李邕を学んだ。北京、故宫博物院に鄧文原急就章の肉筆が収蔵されている。
- 2 理仲雍：字は理熙。于闐の人。生歿年不詳。好古博雅。至大4年(1311)秘書監に任ぜられ、延祐中(1314～1320)に平江路に遷る。
- 3 史游：漢の人。生歿年不詳。元帝の時黄門令となる。字学に精しく、書に工み。急就章4巻を著す。
- 4 顔籀為注：顔籀(581～645)は字は師古。陝西の人。訓詁学に通じた。注とは『急就篇』に注を施したことをいう。
- 5 皇象：三国呉、生歿年不詳。字は休明。広陵江都の人。官は青州刺史に至る。八分、小篆をよくし、最も章草に工み。
- 6 黄伯思：1079～1118。字は長睿。号は雲林子。邵武の人。元符3年(1100)の進士で、官は秘書郎に至る。古代文字を好み、また書は各体ともよくした。著に『東觀余論』『法帖刊誤』がある。
- 7 玉煙堂：明の集帖の玉煙堂帖24巻。陳瓛の撰、呉之驥の刻。万曆40年(1612)刻成。巻1に史游急就章がみえる。
- 8 松江宋克補書：明の楊政が松江本を刻する際に、欠落していた300余字を宋克の倣補した墨跡を以て補った。宋克(1327～1387)は字は仲温。号は南宮生。蘇州の人。
- 9 戲鴻堂徐鉉：徐鉉(916～981)は、字は鼎臣。号は騎省。揚州の人。古文字学に通じ、『説文解字』を校訂した。書は篆、隸をよくした。『戲鴻堂帖』巻10にみられる。
- 10 三希堂趙書：趙孟頫の臨急就章にはいくつもあり、『三希堂帖』にみられるのは大徳7年(1303)のものである。
- 11 蘇頌道：未詳。
- 12 自題云：『東觀余論』巻下「跋蘇頌道求章草巻後」に「蘇頌道 此の紙を以て僕に章草急就篇を求む。既に之が為に書し並びに出師頌等三篇、及び紙尾に於て論書数条を書し、以て此の巻の字勢を尽くす。筆蹟は昔人に媿じずと雖も、然れども魏晉以先の書法を知らざる者には、願わくは之を示すこと勿かれ。大観四年六月庚寅、黄某長睿書。」とある。

(大嶋英里)

【No.109】

程氏鶴銘一卷 焦山海雲堂本

清程康莊¹摹。康莊武鄉人。順治時為鎮江通判。以瘞鶴銘²恒在水中。遊覽者每不得見。乃取玉煙堂刻本重摹於石。每行二字。共十三石。橫亘五丈余。置之海雲堂兩廡中。吳人潘陸計僑³助成之。康熙元年二月訖工。程及王漁洋皆有跋。此銘於雍正間陳滄洲⁴移石出水。搨本遂多。前此沈江水中。非水涸不能施行。且不能得其全字。玉煙所刻。殊不相似。程云。神韻宛然。謂僅似玉煙耳。古人摩崖之刻。皆書丹於石。石有凹凸断裂。則避之或縮小其字。如此銘表留等字以讓石而縮小。玉煙之刻不知其義。展而大之。俾皆一律。則失真之甚者。原石出水。即經洗剔。徐壇長⁵題滄洲搨贈本云。昔日埋沒於蛇龍之窟。未為不幸。後此愈搨愈漫。洗剔不知若干次。至光緒時僧鶴洲⁶搨本。清朗極矣。任意剝鑿。筆意全失。可謂一字不存。夫重刻似與不似。與原石無傷。若就原碑洗剔是使古刻蕩然無復存留。至可太息痛恨。程刻自原石移出。無復搨者。今已罕見。漁洋兩跋。僅及遊山之事。謂來遊在冬月。得至雷轟石⁷下。搜剔盡致。而不言及程刻。何也。

清の程康莊の摹。康莊は武郷の人。順治の時 鎮江通判と為る。瘞鶴銘恒に水中に在るを以て遊覽者は毎に見るを得ず。乃ち玉煙堂の刻本を取りて石に重摹す。每行二字、共に十三石。横は五丈余りに亘る。之れを海雲堂の兩廡中に置く。吳人の潘陸、計僑 之を助成し、康熙元年(1662)二月に訖工す。程及び王漁洋(士禎 1634～1711)皆な跋有り。此の銘は雍正間に於て、陳滄洲 石を移して水より出だし、搨本遂に多し。此れより前は江水中に沈みたれば、水涸るるに非ずんば施工する能わず、且つ其の全字を得る能わず。玉煙の刻する所、殊に相似ず。程云う、「神韻宛然。謂らく僅かに玉煙に似るのみ。」と。古人の摩崖の刻は、皆な石に書丹す。石に凹凸断裂有れば、則ち之れを避け、或いは其の字を縮小す。此の銘の「表留」等の字の如きは、石に讓るを以て縮小す。玉煙の刻は其の義を知らず、展べて之れを大にし、皆な一律せしむるは、則ち真を失うの甚だしき者。原石水より出で、即ち洗剔を経。徐壇長 滄洲の搨贈本に題して云う、「昔日 蛇龍の窟に埋没するは、未だ不幸と為さず。此れより後 愈いよ搨し愈いよ漫なり。洗剔若干次なるを知らず。」と。光緒の時の僧鶴洲の搨本に至っては、清朗極まる。意に任せて剝鑿し、筆意全失し、一字も存せずと謂うべし。夫れ重刻の似ると似ざるとは、原石に与(おい)て傷る無し。原碑に就きて洗剔するが若きは、是れ古刻をして蕩然として復た存留すること無からしむ。太息痛恨すべきに至る。程刻は原石移出してより、復た搨する者無し。今已に見ること罕なり。漁洋の兩跋は僅かに遊山の事に及び、來遊の冬月に在るを謂うのみ。雷轟石の下に至り、搜剔尽く致すを得るも、程刻に言及せざるは何ぞや。

[注]

- 1 程康莊：字は坦如。武郷の人。
- 2 瘞鶴銘：梁、天監13年(514)説の名刻。江蘇省鎮江市の東北、揚子江中の焦山碑林中の一つ。
- 3 吳人潘陸計僑：康莊の跋に見える。
- 4 陳滄洲：陳鵬年(1663～1723)。字は北溟。滄洲は号。諡は恪勤。康熙30年の進士。江中より引き上げ焦山に移置したのは、鎮江知府であった時。
- 5 徐壇長：徐用錫。宿遷の人。康熙48年の進士。
- 6 僧鶴洲：未詳。
- 7 雷轟石：張弢「瘞鶴銘弁」に「…昔日轟裂之時、正值雷雨之夕、俗因伝為雷轟石。…」と由来が見える。

(入山征弘)

【No.110】

玉褚齋法帖¹四卷 商丘陳氏本

清陳淮²輯。淮。字望之。号藥州。精賞鑑。富收藏。同時盛流如成邸。王夢樓諸人均与往還。此以家藏墨跡上石。卷一歐陽率更夢尊帖³。孫過庭獅子圖賦。唐臨黃庭、李北海書出師表⁴。卷二懷素聖母帖。宋高宗与岳武穆

勅。向子諲蘭亭跋。呂文靖。司馬溫公。黃山谷。史浩書札。米南宮御書贊。張考伯劄子。卷三米南宮父子。朱文公。陸放翁書札。張九成夜坐詩⁵。趙文敏書札。赤壁二賦。兪紫芝黃庭⁶。李仲賓海賦⁷。卷四張天雨台仙閣記⁸。柯九思上清宮詩⁹。祝枝山東坡雜記。董香光杜詩。黃庭。樂志論¹⁰。吳佖朋閣中人帖¹¹。帖中宋元人書皆佳。其唐人書五種。獅子賦。出師表。聖母帖三帖均偽。獅子賦筆弱而氣不貫。當是集書譜中字為之。出師表較勝滋蕙堂本¹²。其偽則一。聖母鈎摹陝刻。謬誤甚多。王百穀題謂此真跡而石本偽。適得其反。安有刻本不誤墨跡軼誤之理乎。宋蹟惟御書贊非米筆。香光亦誤以為真。以望之之精鑑。所収唐跡多偽。唐人伝書之少可知。成邸言望之多藏厚亡。為貧得者戒。當時或不免巧取豪奪耶。摹勒者湯銘。嘉慶時以刻石擅名。叢刻多出其手也。

清の陳淮の輯。淮は字は望之、号は薬州、賞鑑に精しく、収蔵に富む。同時の盛流の成邸、王夢樓(文治 1730～1802)諸人の如きは均しく与に往還す。此れは家蔵の墨跡を以て上石す、卷一は歐陽率更の夢奠帖、孫過庭の獅子図賦、唐臨の黃庭、李北海(邕 678～747)書の出師表。卷二は懷素の聖母帖、宋の高宗の岳武穆に与うるの勅、向子諲(1068～1153)の蘭亭跋、呂文靖(夷簡 979～1044)、司馬溫公(司馬光 1019～1086)、黃山谷(庭堅 1045～1105)、史浩(直翁 1106～1194)書札、米南宮(芾 1051～1107)の御書贊、張考伯の劄子。卷三は米南宮父子、朱文公(熹 1130～1200)、陸放翁(游 1125～1210)の書札、張九成(子韶 1092～1159)の夜坐詞、趙文敏(孟頫 1254～1322)の書札、赤壁二賦、兪紫芝(和)の黃庭、李仲賓(衍 1187～1244)の海賦。卷四は張天雨(雨 1277～1348)の台仙閣記、柯九思(1290～1343)の上清宮詩、祝枝山(允明 1460～1526)の東坡雜記、董香光(其昌 1555～1636)の杜詩、黃庭、樂志論、吳佖朋(説 ?～1169以後)の閣中人帖。帖中の宋元人の書は皆な佳し。其の唐人の書五種は、獅子賦、出師表、聖母帖の三帖均しく偽なり。獅子賦は筆弱くして氣貫かず、當に是れ書譜中の字を集め之れを為る。出師表は較や滋蕙堂本に勝るも、其の偽は則ち一なり。聖母は陝刻を鈎摹するも、謬誤甚だ多し。王百穀(穉登 1535～1612)題して謂う。「此れは真跡。而れども石本は偽。」と。適に其の反を得。安くんぞ刻本誤らず墨跡軼誤るの理有らんや。宋蹟は惟だ御書贊のみ米筆に非ざるも、香光は亦た誤りて以て真と為す。望之の精鑑を以てして、収むる所の唐跡に偽多し。唐人の伝わる書の少なきこと知るべし。成邸言う望之は多く蔵して厚く亡う。得るを貪る者の戒めと為すと。當時或いは巧取豪奪を免れずや。摹勒者は湯銘、嘉慶(1796～1820)の時刻石を以て名を擅ままし、叢刻多く其の手に出づるなり。

[注]

- 1 玉褚齋法帖：宇野雪村『法帖事典』に項元沄の刻帖とある。
- 2 陳淮：?～1810。河南省商丘の人。『中国書画家印鑑款識』に「陳淮望之氏一字薬州」「商丘陳淮書畫之印」の印がある。
- 3 歐陽率更夢尊帖：『秘閣統帖』卷8に「歐陽詢夢尊帖」がある。
- 4 李北海出師表：『歷代著録法書目』に、清宮旧蔵歷代法書名画目録10冊の6冊目に李邕「書諸葛亮出師表」がある。
- 5 張九成夜坐詩：張九成の詩集『横浦集』に収録されていない。
- 6 兪紫芝黃庭：『嶽雪樓書畫録三卷』に「元兪紫芝臨黃庭經真跡卷」がある。
- 7 李仲賓海賦：『三秋閣書画録二卷』に「李息齋行書海賦冊」がある。
- 8 張天雨台仙閣記：至正3年(1343)張雨60歳の作。
- 9 柯九思上清宮詩：真跡が中田勇次郎『中国法書大成 歐米収蔵』に見える。
- 10 樂志論：『石渠寶笈』卷3に董其昌「樂志論并仿虞永興書一冊」があるほか、『式好堂薰帖』にも所収。
- 11 閣中人帖：吳説の閣中帖のこと。帖名は冒頭の「閣中人」にちなむ。上海博物館蔵。
- 12 滋蕙堂本：清の曾省軒の刻。乾隆33年(1767)に唐から明までの歷代名跡を摹刻したもの。

(中村垂由視)

【No.111】

東坡大書二卷 旧搨本

宋蘇軾書。一和婦去來辭真書。一録段成式河出榮光詩¹行書。題和婦去來辭云予久有陶彭沢²賦婦去來辭之願而未能。茲復有嶺南之命。料此生難遂素志。舟中無事。倚原韻用魯公書法為此長卷。不過暫舒胸中結滯。敢云与古人並駕寰区也耶。河出榮光詩後楊鉄崖跋云。坡翁此書。筆力雄健。結体渾円。如入山陰堂廡。使人肅然起敬。又洪武二十三年劉基³觀款。二種合装。前書約四寸許。頗有姿致。然全不類蘇。題語尤庸陋。其奎章閣⁴印。晋卿鑑賞⁵等印純為偽造。後一種資江陶氏⁶所刻。有袁忠徹⁷蔵印。忠徹為柳莊⁸之子。収蔵甚富。然其所蓄蘇蹟多贗。否⁹則忠徹印亦偽者。冊尾題云二書坡公神品。当与荔子丹碑¹⁰相抗。學者由此以上窺平原。庶不至迷於趨嚮。此等偽刻遺誤學人不淺。而某君謂可上窺平原。謬妄可笑。刻搨皆旧。当為百余年物也。

宋の蘇軾の書。一は婦去來辭に和すの真書、一は段成式(803?~863)の河出榮光詩を録すの行書。婦去來辭に和すに題して云う、「予久しく陶彭沢の賦せる婦去來辭の願い有るも未だ能わず、茲に復た嶺南の命有り、此の生を料るに素志を遂げ難し。舟中事無く、原韻に倚り魯公の書法を用いて此の長卷を為す。暫く胸中の結滯を舒ぶるに過ぎず、敢えて古人と寰区に並駕すと云わんや。」と。河出榮光詩の後の楊鉄崖(維禎 1296~1370)の跋に云う、「坡翁の此の書、筆力雄健にして、結体渾円たるは、山陰の堂廡に入るが如し。人をして肅然として敬を起さしむ。」と。又た洪武二十三年(1390)の劉基の觀款あり。二種合装。前の書は約四寸許り。頗る姿致有り。然れども全く蘇に類せず、題語は尤も庸陋なり。其の「奎章閣印」「晋卿鑑賞」等の印は純ら偽造為り。後の一種は資江の陶氏の刻する所、袁忠徹の蔵印有り。忠徹は柳莊の子為り、収蔵甚だ富む。然れども其の蓄むる所の蘇蹟は贗多し。則ち忠徹の印も亦た偽なる者なり。冊尾の題に云う、「二書は坡公の神品にして、当に荔子丹碑と相抗たるべし。學ぶ者 此れに由りて以て上のかた平原を窺えば、庶んど趨嚮に迷うに至らず。」と。此れ等の偽刻 誤りを學人に遺ること浅からず。而して某君の上のかた平原を窺うべしと謂うは、謬妄 笑うべし。刻搨は皆な旧し。当に百余年の物と為すべし。

[注]

- 1 河出榮光詩：「符命自陶唐、吾君応会昌。…」で始まる五言古詩。
- 2 陶彭沢：陶淵明(365~427)。彭沢は、義熙元年(405)、彭沢県(現在の江西省)の県令になったことから。
- 3 劉基：1311~1375。字は伯温。青田(浙江省青田)の人。元統元年(1333)の進士。明に入り太祖洪武帝に仕える。ただし、洪武23年(1390)の觀款は生歿年と合わない。
- 4 奎章閣：1329年に元の文宗が設けた文教、芸術の府であり、書画の鑑定、研究を行った専門機関。虞集(1272~1348)が待書学士、柯九思(1290~1343)が鑑書博士に任ぜられたことでも知られる。
- 5 晋卿鑑賞：黄潛に「晋卿鑑賞」印記を見ない。
- 6 資江陶氏：陶舜卿(1298~1346)を始祖とする氏族。(『資江陶氏族譜』)
- 7 袁忠徹：1376~1458。字は公達、または静思。鄞県(浙江省寧波)の人。父袁珙の影響から蔵書、人相学に優れた。
- 8 柳莊：袁珙。字は廷玉。鄞県(浙江省寧波)の人。
- 9 否：衍字か。
- 10 荔子丹碑：韓愈が柳宗元のために送った詩文を蘇軾が書いたとされる碑。現在広西チワン族自治区柳州の柳侯公園内にある。

(青木 豊)

【No.112】

分寧黃帖八卷¹ 山谷祠本

清黃壽英²輯。光緒二十二年勒成。壽英。字菊秋。跋云。文節公書。州中惟存順濟竜王廟記³。釣磯双井⁴二石。嘉慶初。萬文恪⁵搜公遺跡。都為四卷。咸豐兵燹⁶。石毀。今從陳右銘中丞借得原拓。又從胡小雲⁷大令覓得題子瞻書詩後⁸六絕墨跡。暨七仏偈⁹。蓄狸說¹⁰拓本。別搜得戒石銘¹¹。梨花詩¹²。聽松禪室¹³拓本。鉤勒入石。俾永流傳。今觀全帖。前四卷皆萬承風古瓦山房¹⁴所輯。無偽書。惟范文正道服贊跋小楷四行¹⁵。採采自三希堂者不可信。其廉頗藺相如傳¹⁶草書。他刻所不曾見。尤為希有。若壽英所統之題子瞻書詩六絕墨跡。蓄狸說。梨花詩。聽松禪室拓本皆偽書。此外尚有錄淵明詩。贈丘十四詩¹⁷。劉明仲墨竹賦¹⁸三種。跋中未言及。其惡劣視蓄狸說尤甚。統刻之可取者。惟七仏偈。戒石銘。釣磯双井而已。不別真偽。妄事刻帖。無不謬陋可笑者。此亦如襄陽米祠之帖¹⁹。全取偽米。幸有重摹萬氏四卷足觀。萬氏題云。廉藺傳草書。僅刻五分之一。今原跡不詳所在²⁰。無由觀其完璧。殊可惜耳。

清の黃壽英の輯、光緒二十二年の勒成。壽英は、字は菊秋。跋に云う、「文節公の書は、州中 惟だ順濟竜王廟記、釣磯双井の二石を存するのみ。嘉慶の初め、萬文恪は公の遺蹟を搜し、都て四卷と為す。咸豐の兵燹に、石毀す。今 陳右銘中丞より原拓を借り得、また胡小雲大令より題子瞻書詩後六絶の墨跡、暨び七仏偈、蓄狸説の搨本を覓め得、別に戒石銘、梨花詩、聽松禪室の搨本を搜し得、鉤勒入石し、永く流傳せしむ。」と。今 全帖を觀るに、前四卷は皆な萬承風古瓦山房の輯むる所にして、偽書無し。惟だ范文正(仲淹 989~1052)の道服贊の跋の小楷四行は、三希堂より採る者にして信ずべからず。其の廉頗藺相如傳の草書は、他刻に曾て見ざる所にして、尤も希有と為す。壽英の續くる所の題子瞻書詩六絶の墨跡、蓄狸説、梨花詩、聽松禪室の搨本の若きは皆な偽書。此の外尚お淵明詩、贈丘十四詩、劉明仲墨竹賦の三種を録する有るも、跋中に未だ言及せず。其の惡劣は蓄狸説に視べて尤も甚だし。統刻の取るべき者は、惟だ七仏偈、戒石銘、釣磯双井のみ。真偽を別たず、妄りに刻帖を事とす、謬陋の笑うべからざる者無し。此れは亦た襄陽米祠帖の、全て偽米を収るが如し。幸いに重摹の萬氏の四卷の觀るに足る有り。萬氏題して云う、「廉藺傳の草書は、僅かに五分之一を刻するのみ。」と。今 原跡は所在を詳らかにせず、其の完璧を觀るに由し無し。殊に惜むべきのみ。

[注]

- 1 分寧黃帖八卷：『叢帖目 3』にあり。また『黃庭堅書法全集』（江西教育出版社）卷5に、「三是光緒二十二年（1896）分寧黃壽英（字菊秋）所刻《分寧黃帖》八卷。因萬氏『黃文節公法書』原石被毀、黃壽英除據原拓翻刻四卷外、又增刻了另外四卷。」と記されている。中田勇次郎『黃庭堅全集』には未収。
- 2 黃壽英：生歿年未詳。湘西の人。知義寧州。增訂重刻綢香堂本『山谷全書』を所持した。
- 3 順濟竜王廟記：江西省義寧の南山順濟竜王廟記碑(楷書)を指す。元豐6年(1083)の書、淳熙6年(1179)の刻。『攷古録』に見える。湖北襄陽図書館に拓がある。
- 4 釣磯双井：釣磯題字と双井題名(行楷書)の兩刻。崇寧元年(1102)江西省修水縣義寧鎮にあった摩崖で、原石はいま双井村明月灣修江の岸にある。
- 5 萬文恪：未詳。
- 6 咸豐兵燹：太平天國の兵亂を指す。
- 7 胡小雲：未詳。
- 8 題子瞻書詩後：行書の六言古詩1首。
- 9 七仏偈：廬山七仏偈ともいう。元祐6年(1091)12月に廬山の開先寺で制作した摩崖刻石。総字数は1090字。原石は、江西省星子縣秀峰景区にある。『攷古録』『芸風堂金石文字目』『蒼潤軒帖跋』に見え、首都図書館に拓がある。

- 10 蓄狸説：大楷書。湖北襄陽図書館に胡繩の寄贈本がある。
- 11 戒石銘：宋高宗の御製文。高宗の紹聖2年の書。
- 12 梨花詩：梨花詩三十首のこと。書体は小楷書。
- 13 聽松禪室：行書の題額四字。
- 14 万承風古瓦山房：万承風(1751～1813)の室号。万承風は字はト東、号は和圃、修水の人。乾隆46年(1781)の進士で、官は兵部侍郎。
- 15 道服賛跋小楷四行：墨跡は北京故宮博物院所蔵の范文正「道服賛」巻後に見える。刻本は清の黄涓『宋黄文節公法書』巻1第1種に見える。
- 16 廉頗藺相如伝：墨跡は紹聖6年(1098)の紙本。大草書205行1170字。現在はメトロポリタン美術館の蔵。
- 17 贈丘十四詩：行書の七言古詩。拓本は『黄文節公法書石刻』巻3に見える。
- 18 劉明仲墨竹賦：劉明仲は墨竹の名手。元祐3年(1088)、首都開封での書とされている。刻本は『黄文節公法書石刻』に見える。また『墨林快事』にも記録がある。湖北襄陽図書館に拓がある。
- 19 襄陽米祠之帖：『叢帖目4』にあり。8巻。
- 20 今原跡不詳所在：注16を参照。

(澤岡雪子)

【No.113】

尚古堂帖一卷

元趙孟頫書。無勒石姓名年月。後有王鐸題賛。則清代刻也。所書金丹四百字¹。字大不及三分。吳中所刻有松雪行書本。其字稍大。此真楷。而筆画枯直無轉折。唐宋以來。仏道經典往往依托書家之名。如褚河南西昇經²。真草陰符經。虞永興破邪論序。歐陽率更心經之類。雖流伝宋搨。皆成著名之帖。而覈其實際。每不可信。此四百字楷法精整。刻搨亦美。画像具有古意。但謂出子昂手。則未必然。王覺斯紫陽真人張平叔³賛云。猗歟紫陽。秘旨洋洋。鉛汞有訣。坎離知彰。雁蕩之鄉。万載名揚。遇有神遇。妄伝致殃。杏林⁴解韁。授以玄房。悟真一書⁵。明發金光。四百字義。摺尽丹藏。猗歟紫陽。道高德厚。地久天長。其楷更小於松雪。然筆法亦不類覺斯。殆与趙楷同出依託。前有節庵学人印⁶。当為梁鼎芬氏⁷蔵本。「尚古堂」三字隸書。不審誰氏齋名。後有退谷之印⁸。則別為一人。非孫北海也。

元の趙孟頫(1254～1322)の書。勒石の姓名年月無し。後に王鐸の題賛有れば、則ち清代の刻なり。書する所の金丹四百字は、字は大きさ三分に及ばず。吳中に刻する所に松雪の行書本有り。其の字稍や大なり。此れは真楷。而して筆画は枯直にして転折無し。唐宋以來、仏道の經典 往往にして書家の名に依托す。褚河南(遂良 596～658)の西昇經、真草陰符經、虞永興(世南 558～638)の破邪論序、歐陽率更(詢 557～641)の心經の類の如きは、流伝の宋搨は皆な著名の帖と成ると雖も、而れども其の實際を覈べれば、毎に信ずべからず。此の四百字の楷法は精整にして、刻搨も亦た美なり。画像は古意を具有す。但だ子昂の手に出づと謂わば、則ち未だ必ずしも然らず。王覺斯の紫陽真人 張平叔の賛に云う、「ああ紫陽、秘旨は洋洋たり。鉛汞 訣有り、坎離 彰を知る。雁蕩の郷、万載 名揚がる。遇たま神遇有り、妄に伝うれば殃を致す。杏林韁を解き、授くるに玄房を以てす。悟真の一書は、金光を明發し、四百の字義は、丹藏を摺尽す。ああ紫陽、道高く徳厚し、地久しく天長し。」と。其の楷は更に松雪よりも小なり。然れども筆法は亦た覺斯に類せず。殆んど趙楷と同じく依託に出づ。前に「節庵学人」の印有り。当に梁鼎芬氏の蔵本為るべし。「尚古堂」の三字の隸書は、誰氏の齋名なるやを審らかにせず。後に「退谷之印」有り。則ち別に一人と為す。孫北海に非ざるなり。

[注]

- 1 金丹四百字：張伯端(注3参照)の『金丹四百字』。No.95趙魏公書画一卷の項参照。
- 2 西昇經：『老子西昇經』。
- 3 紫陽真人張平叔：北宋末の道士、張伯端(987～1082)。平叔は字。一名は用成。号は紫陽。天台纓絡街(現在の浙江省天台県)の人。後に紫陽真人と尊称され、全真道の南五祖の初代とされた。
- 4 杏林：医者のこと。
- 5 悟真一書：『悟真篇』。
- 6 有節庵学人印：『中国書画家印款識』に梁鼎芬未収。『近現代書画家款印』梁鼎芬にこの印記なし。
- 7 梁鼎芬氏：1859～1919。清代の学者で、藏書家。字は星海、心海、伯烈。号は節庵、不回山民、孤庵。
- 8 退谷之印：未詳

(松岡美佐希)

【No.114】

葉洲帖一卷 広州藩署本

宋米芾書葉洲¹及米黻元章題七字。為広州九曜石²之一。元章未更名以前所書也。後有時中公翽積中³同遊。元祐丙寅季春初八日題十八字。不知為何人書。而翁覃溪則謂前後廿五字同為米蹟⁴。誤也。桂林還珠洞元章与游景仁⁵同題名。其米黻二字同此。因知葉洲字非元祐間書。且此兩題筆法字形全不似。何謂皆米書乎。覃溪論古往往謬誤。此其至顯然者。乃著論數百言以申其說。徒辭費耳。覃溪自書三則。一米題葉洲石記。一題趙邃樓新葺葉洲石亭壁二絕。一七言古詩。余則阮元和韻二絕⁶。趙慎畛⁷隸書題跋。慎畛即邃樓。時為粵藩司也。跋云：覃溪先生宏覽多聞。久推海內靈光。生平考覈金石文字。剖析豪芒。幾欲駕洪文惠⁸而上之。督學粵東時。著粵東金石略十二卷。九曜石考二卷。蒐討甚詳。藩屬東園⁹。向有九曜石之一。米南宮題廿五字。先生屢欲還之葉洲不果。畛築亭度石。乞為文以記。先生欣然命筆。並寄所撰海岳年譜。及郵到而先生旅歸道山。先生年逾大耋。八千里拳拳一石。好古何其篤也。邃樓跋於嘉慶戊寅。亦以廿五字皆南宮書。則篤信覃溪之說耳。

宋の米芾の書の「葉洲」及び「米黻元章題」の七字は、広州の九曜石の一と為す。元章未だ名を更めざる以前の書する所なり。後に「時仲、公翽、積中同遊す。元祐丙寅(元年1086)季春初八日題す。」の十八字有り。何人の書為るやを知らず。而るに翁覃溪は則ち前後廿五字同に米蹟と為すと謂うは、誤りなり。桂林の還珠洞の元章游景仁と同一に題名すの、其の「米黻」の二字は此れに同じ。因りて「葉洲」の字は元祐間の書に非ざるを知る。且つ此の兩題の筆法字形は全く似ず。何ぞ皆な米書と謂わんや。覃溪古を論じては往往にして謬誤す。此れは其の至って顯然たる者なり。乃ち數百言を著論して以て其の説を申ふるは、徒だ辭を費すのみ。覃溪自書の三則は、一米題葉洲石記、一は趙邃樓新葺の葉洲石亭の壁に題するの二絶、一は七言古詩、余は則ち阮元の和韻の二絶なり。趙慎畛隸書もて跋を題す。慎畛は即ち邃樓、時に粵藩司為り。跋に云う、「覃溪先生は宏覽多聞にして、久しく海内の靈光と推さる。生平金石文字を考覈し、豪芒を剖析して、幾ど洪文惠を駕ぎて之に上らんと欲す。粵東に督學たりし時、『粵東金石略』十二卷、『九曜石考』二卷を著す。蒐討甚だ詳し。藩属の東園に、向に九曜石の一有り、米南宮廿五字を題す。先生屢しば之を葉洲に還さんと欲するも果さず。畛亭を築きて石を度(お)き、文を為りて以て記せと乞う。先生欣然として筆を命じ、並びに撰せる所の『海岳年譜』を寄す。郵到るに及びて先生は道山に旅歸す。先生年は大耋を逾ゆ。八千里の拳拳たる一石、好古何ぞ其れ篤きや。」と。邃樓は嘉慶戊寅(23年 1818)の跋に、亦た「廿五字は皆な南宮の書」を以てするは、則ち覃溪の説を篤く信ずるのみ。

[注]

- 1 葉洲：五代南漢の千年園林という遺跡。葉洲は古代の方士が丹薬を煉る場所をいう。

- 2 廣州九曜石：葉洲遺跡中の9つの石。明代に「葉洲春暎」と称された羊城八景の一つ。8石が現存する。
- 3 時中、公詡、積中：ともに人名。うち公詡は宋代進士張公詡。残る2名は未詳。
- 4 前後廿五字同為米蹟：「前後廿五字云々」は翁方綱(1733～1818)の『粵東金石略』九曜石考に見える。
- 5 游景仁：游似(?～1252)。景仁はその字。南宋の蜀中四賢相の1人。ただし、還珠洞に「元章与游景仁同題名」はなく、「米穀与潘景純同遊、熙寧七年五月晦」の題名は桂林伏波岩に見える。「元章与游景仁同題名」とはこの潘景純との題名の誤記と思われる。
- 6 和韻二絶：未詳。
- 7 趙慎畛：?～1826。字は遂楼、清の武陵県石板灘(今の湖南省常德市)の人。嘉慶元年の進士。官は広東布政使に至る。隸書題跋は《楡巢雜識》に見える。
- 8 洪文恵：洪适(1117～1184)。宋代の金石学家。字は景伯、晩号は盤洲老人。饒州鄱陽(今の江西省波陽県)の人。『隸釈』27卷『隸統』21卷を著す。
- 9 藩属東園：『粵東金石略』九曜石考には「藩署二堂東院中」とある。

(賈 川)

【No.115】

天瓶齋帖四卷

清張照¹書。刻者無姓名年月。觀其搨法。似木非石。卷一臨鍾繇宣示表。王虞鄭夫人表。王羲之霜寒表。縮臨定武蘭亭。王獻之十三行。卷二臨董香光書姜宝告身²。卷三臨董書報国寺觀松詩。卷四御製虚受箴。其臨晋帖皆有跋。鄭夫人表云。王侍中此書。黃長睿所謂能伝鍾氏筆意³者。家有宋搨失其半。馮氏所刻。形神俱泯。馮刻謂快雪堂⁴也。快雪世將二表⁵摹自大觀。不知天瓶所藏宋搨為何本。天瓶手録長睿刊誤之閣帖。題為宋搨。以贈桐城張文和。二人皆有画像。備極珍重。清季滬上印出。其搨墨作布紋而帖則翻顧刻。不知天瓶鑑帖何以疏謬若此。霜寒帖云。江村高文恪家有宋本。少曾借摹此從摹本想像為之。老兵固全不似中郎⁶也。此表宋本。惟絳帖有之。劉石庵謂非右軍。其所鑑實勝天瓶。但宋刻宋搨亦自可貴。十三行臨玄宴齋本⁷謂是明刻第一。香光報国寺松詩。晚年之書。蒼厚入古。天瓶用力追取方整過之。惟嫌肉勝。梁聞山謂天瓶臨董。直出其上。恐非篤論。此与虚受箴皆方寸大楷。為初学影本甚善。所刻視曲阜孔氏為佳。猶乾嘉間旧本也。

清の張照の書、刻者に姓名年月無し。其の拓法を觀るに、木に似て石に非ず。卷一は鍾繇の宣示表、王虞の鄭夫人表、王羲之の霜寒表、縮臨定武蘭亭、王獻之の十三行を臨す。卷二は董香光書の姜宝告身を臨す。卷三は董書の報国寺觀松詩を臨す。卷四は御製の虚受箴。其の臨晋帖には皆な跋有り。鄭夫人表に云う、「王侍中(虞)の此の書は、黃長睿(伯思)の謂う所の能く鍾氏の筆意を伝うる者なり。家に宋拓有るも其の半を失う。馮氏の刻する所は、形神俱に泯ぶ。」と。馮刻は快雪堂を謂うなり。快雪の世將の二表は大觀(帖)より摹す。天瓶所藏の宋搨は何本為るやを知らず。天瓶手づから長睿の刊誤の閣帖を録し、題して宋拓と為し、以て桐城の張文和(廷玉)に贈る。二人皆な画像有り。備に珍重を極む。清季 滬上より印出す。其の搨墨は布紋を作すも、而れども帖は則ち顧刻を翻す。天瓶の帖を鑑する、何を以て疏謬此の若きかなるやを知らず。霜寒帖に云う、「江村高文恪(士奇 1645～1704)の家に宋本有り、少くして曾て借摹す。此れは摹本より想像して之を為る。老兵は固より全く中郎に似ざるなり。」と。此の表は宋本、惟だ絳帖にのみ之れ有り。劉石庵(塘)は右軍に非ずと謂う。其の鑑する所は實に天瓶に勝る。但だ宋刻宋搨なれば亦た自ら貴ぶべし。十三行は玄宴齋本を臨して、是れ明刻第一と謂う。香光の報国寺の松の詩は、晩年の書、蒼厚にして古に入る。天瓶力を用て追取し、方整之れに過ぎ、惟だ肉の勝るを嫌うのみ。梁聞山謂う、天瓶の董を臨しては、直ちに其の上に出づとは、恐らくは篤論に非ず。此れと虚受箴とは皆な方寸の大楷なれば、初学の影本と為すは甚だ善し。刻する所は曲阜の孔氏に視べて佳と為す。猶お乾嘉

の間の旧本のごときなり。

[注]

- 1 張照：1691～1745。字は得天。号は涇南、梧窓。帖学派の代表。
- 2 董香光書姜告身：張照『天瓶齋書畫題跋』卷上に「跋董文敏書金沙姜鳳阿尚書官銀台告身」あり。
- 3 能伝鍾氏筆意：黃伯思『東觀余論』法帖刊誤下にみえる。
- 4 快雪堂：馮銓が崇禎14年(1641)に刻し始めた集帖。
- 5 世將二表：王虞の二帖。すなわち祥除帖と鄭夫人表(昨表帖)。
- 6 老兵固全不似中郎：未詳。
- 7 玄宴齋本：孫慎行が唐順之本を玄宴齋に重刻したもの。

(包 永勝)

【No.116】

式好堂手沢四卷¹ 中牟倉氏本

清倉景恬²刻其父兆彬³及其伯父兆麟⁴之書。第一卷兆麟書程子四箴⁵。自作秋興六首。余則兆彬所臨古帖。第二卷兆彬臨唐人書及唐詩。第三卷兆彬書格言。第四卷兆麟家書三通。余皆兆彬也。兆麟。字定生。兆彬。字藹平。二人所書亦如兄弟。同學顏平原。皆無甚筆力。兆彬臨爭坐帖最多。有縮為蠅頭者。景恬跋云。先君生平臨此不下千余本。此刻亦惟臨爭坐者可觀。有臨蘇。黃。米書則拙甚。二卷中之長恨歌楷字。字若指頂。下筆肥重。欲仿錢南園體。而拙鈍至不可耐。由於不解筆法。思求高古。醜態畢露。軀不若謹守規矩。尚能平正也。刻者德清徐敦澄及長沙汪鏞⁶。鏞。字嘯霞。曾摹翁覃溪縮臨蘭亭⁷。曰石壽山房本。甚著名。此書無可觀採。雖能手奏刀。亦無所用。景恬刻其先人之書。自不必以工拙論也。道咸間倉氏兄弟。書名在開封頗見重。今罕有稱及者矣。

清の倉景恬 其の父兆彬及び其の伯父兆麟の書を刻す。第一卷は兆麟の書せる程子四箴、自作の秋興六首。余は則ち兆彬の臨する所の古帖。第二卷は兆彬の臨唐人の書及び唐詩。第三卷は兆彬の書の格言。第四卷は兆麟の家書三通。余は皆な兆彬なり。兆麟は、字は定生。兆彬は、字は藹平。二人の書する所も亦た兄弟の如し。同じく顏平原(真卿 709～785)を学び、皆な甚しくは筆力無し。兆彬 争坐帖を臨すること最も多し。縮めて蠅頭に為る者有り。景恬の跋に云う、「先君は生平此を臨すること千余本を下らず。」と。此の刻も亦た惟だ争坐を臨する者にして觀るべし。蘇、黃、米書を臨するもの有り、則ち拙なること甚し。二卷中の長恨歌は楷字、字は指頂の若し。下筆は肥重たり。錢南園(澧 1740～1795)の体を仿わんと欲す。而れども拙鈍耐うべからざるに至る。筆法を解せざるに由る。高古を思求するも、醜態畢く露われ、軀って規矩を謹守し、尚お平正を能くするに若かざるなり。刻者は德清の徐敦澄及び長沙の汪鏞。鏞は、字は嘯霞。曾て翁覃溪の縮臨蘭亭を摹す。石壽山房本と曰う。甚だ著名。此の書は觀て採るべき無し。能手の奏刀と雖も、亦た用いる所無し。景恬は其の先人の書を刻す。自ずから必ずしも工拙を以て論ぜざるなり。道咸(道光 1821～1850 咸豐 1851～1861)の間 倉氏兄弟は、書名 開封に在りて頗ぶる重ぜらる。今稱及する者有ること罕なり。

[注]

- 1 式好堂手沢四卷：叢帖目になし。<http://jd.cang.com/298495.html>に一部の画像あり。
- 2 倉景恬：1816～1890。字は靜則、少平、少坪、靜叟と号す。『民国25年 中牟県志』選挙に「道光十五年乙未恩科、倉景恬、見進士、城北倉寨人。」「道光十八年戊戌科、倉景恬、城東北倉寨人、翰林院編修、湖北正考官、湖南按察使、加布政使銜、賞戴花翎。」とあり。『虚受堂文集』卷10に「布政使銜雲南按察使倉公墓誌銘」がある。
- 3 兆彬：生歿年不詳。『清人室名別称字号索引』では字は莒坪、号は左手老人、均齋、藹平、式好堂とある。

『民国25年 中牟県志』選挙に「倉兆彬、以子景恬貴、封朝議大夫晋贈通議大夫。」とある。

- 4 兆麟：生歿年不詳。『清人室名別称字号索引』に食旧堂の号がある。『民国25年 中牟県志』選挙に「倉兆麟、以姪景恪貴、封文林郎。」とある。
- 5 程子四箴：程頤(1033～1107)の撰書。視箴、聽箴、言箴、動箴の4篇からなる。『二程全書』卷62所収。
- 6 徳清徐敦澄及長沙汪鏞：徐敦澄は『石刻刻工研究』に見えない。汪鏞は本誌「書道学論集8」No.49「書道学論集10」No.82を参照。また法帖提要No.320「石寿山房蘭亭帖」にもみえる。
- 7 翁覃溪縮臨蘭亭：「書道学論集10」No.82を参照。

(塩島敏子)

【No.117】

木天¹楷則一卷 通行本

清尚培源²勒石。前有序記。失其姓名年月。書十有五家。張照。汪由敦³。劉統勳⁴。嵇璜⁵。劉綸⁶。周煌⁷。裘日修⁸。錢維城⁹。王際華¹⁰。梁国治¹¹。劉墉。莊培因¹²。彭元瑞¹³。王杰¹⁴。董誥¹⁵。皆雍乾間翰苑中有書名者。序云晋唐以来。章楷¹⁶石刻無慮數百種。然用諸殿廷。合度者鮮。蓋應制體章法謹嚴。与古帖之以欹側映帶成章法者迥別。結字雖間用帖體。而帖體中有斷不容入應制書者。不可不厘別也。顧此體無專刻。學者求善本臨摹。苦不易得。客歲偶購一冊。乃詞館諸前輩恭和宸章摺片。彙而成帙。楷法精妙。結體分行。皆可為應制圭臬。特摹勒為書塾臨本。此下適少一葉。故無姓名。觀其書體。當是郭尚先¹⁷作。尚培源為李春湖¹⁸刻唐本廟堂碑。是郭蘭石所介紹。因知此序為蘭石筆無疑。前題木天楷則四隸字。此書均不高古。即劉石庵作。亦字字勻円。異於平時體勢。蓋摺卷之書。与八比¹⁹試帖²⁰同。有格式限之也。臨古帖每不易肖。學近人書則易於相似。故科舉時此刻盛行。干祿之體。固自古有之矣。

清の尚培源の勒石。前に序記有り。其の姓名年月を失う。書は十有五家。張照、汪由敦、劉統勳、嵇璜、劉綸、周煌、裘日修、錢維城、王際華、梁国治、劉墉、莊培因、彭元瑞、王杰、董誥。皆な雍乾間の翰苑中に書名有る者。序に云う、「晋唐以来、章楷の石刻は無慮數百種。然れども諸を殿廷に用うれば、度に合う者鮮し。蓋し應制體は章法謹嚴にして、古帖の欹側を以て映帶し章法を成す者と迥に別なればなり。結字は間ま帖體を用うと雖も、而ども帖體中に断じて容に應制書を入るるべからざる者有り。釐も別たざるべからず。顧みるに此の體 專刻無ければ、學ぶ者善本を求めて臨摹し、得るに易からず苦しむ。客歲 偶たま一冊を購う。乃ち詞館の諸前輩の恭しく宸章に和する摺片、彙めて帙を為す。楷法の精妙、結體の分行は、皆な應制の圭臬と為すべし。特に摹勒して書塾の臨本と為す。」と。此の下 適たま一葉を少く。故に姓名無し。其の書體を觀るに、當に是れ郭尚先の作なるべし。尚培源 李春湖の為に唐本廟堂碑を刻す。是れ郭蘭石(郭尚先 1785～1832)の介紹する所。因りて此の序は蘭石の筆と為して疑い無きを知る。前に「木天楷則」の四隸字を題す。此の書は均しく高古ならざるも、即ち劉石庵の作。亦た字字勻円にして、平時の體勢に異なる。蓋し摺卷の書と、八比の試帖とは同じく、格式の之れを限り有るなり。古帖を臨するに毎に肖せ易からず。近人の書を學ぶは則ち相似るに易し。故に科舉の時 此の刻盛行す。干祿の體は、固より古より之有り。

[注]

- 1 木天：翰林院を指す。
- 2 尚培源：不詳。
- 3 汪由敦：1692～1758。字は師茗、号は講堂、松泉、諡は文端、安徽省休寧の人。雍正2年(1724)の進士、官は吏部尚書に至った。歿後にその書を摹勒上石した『時晴齋法帖』がある。
- 4 劉統勳：1699～1773。字は爾鈍、号は延清。諡は文正、山東省諸城の人。劉墉(1720～1804)の父。雍正2年

- (1724)の進士、官は東閣大学士・太子太保に至った。
- 5 嵇璜：1711～1794。字は尚佐。江蘇省無錫の人。
 - 6 劉綸：1711～1773。字は如叔。また字は宸翰、慎涵、慎翰、春涵などが多い。江蘇省常州府武進県(今は常州市武進区)の人。劉逢祿の祖父。
 - 7 周煌：1714～1785。字は景桓、号は緒楚、海珊(海山)。清の重慶府涪州(今の重慶市涪陵区)の人。乾隆22年(1737)の二甲進士。翰林院編修を19年任じた。諡は文恭。
 - 8 裘曰修：1712～1773。字は叔度、号は諾臯。江西省新建の人。乾隆4年(1739)進士で礼、刑、工三部の尚書を歴任した。勅撰の『西清古鑑』『石渠宝笈』『秘殿珠林』等の纂修に加わった。
 - 9 錢維城：1702～1772。字は宗盤、号は稼軒ほか、諡は文敏。惟喬の兄で江蘇省武進の人である。乾隆10年(1745)状元で、翰林院修撰より累進し、刑部左侍郎に至った。著に『茶山集』がある。
 - 10 王際華：1717～1776。字は秋瑞。浙江省錢塘の人である。乾隆10年(1745)の進士で、編修を授けられた。41年に歿し太子太保を贈られた。諡は文莊。
 - 11 梁国治：1723～1786。字は陸平、号は瑶峰。諡は文定といい、浙江省紹興の人。乾隆13年(1748)状元(進士首席)で、翰林院修撰より累進し、東閣大学士兼戸部尚書に至った。
 - 12 莊培因：不詳。
 - 13 彭元瑞：1731～1803。字は芸楣。乾隆22年(1757)の進士で、礼、兵、工三部の尚書、協辦大学士。嘉慶8年に亡くなり、太子太保を贈り、諡は文勤。
 - 14 王杰：1725～1805。字は偉人、号は惺園、葆淳。陝西省韓城の人。乾隆21年(1761)状元で、修撰より累進して東閣大学士に至った。碑版を考証した題跋は『兩漢金石記』にも採られた。
 - 15 董誥：1740～1818。字は雅倫、号は蔗林。董邦達の長子、浙江富陽の人。乾隆28年の進士。諡は文恭。
 - 16 章楷：正楷をいう。南朝宋の羊欣『古來能書人名』に「瑯琊王虞、晋平南將軍荊州將軍、能章楷、伝鍾法。」と見える。
 - 17 郭尚先：1785～1832。字は蘭石、号は元開、伯柳。福建省莆田の人。嘉慶14年(1809)の進士で、翰林院編修から大理寺卿に至った。著に『芳堅館題跋』がある。
 - 18 李春湖：李宗瀚1770～1832。字は公博、号は春湖。江西省臨川の人。乾隆57年の挙人、乾隆58年(1793)の進士で、累進して浙江学政に至った。著に『葦廬詩集』がある。
 - 19 八比：八股文の別称である。
 - 20 試帖：科挙試の答案。

(栗 躍崇)

【No.118】

蘇橋¹宦蹟一卷 激浦舒氏本

清舒恭寿²以其父蘇橋宦蹟四図。徵集題詠勒石。自跋云。道光癸未。先大夫以庶常散館授巢県。由牧守至監司。仕皖垂三十年。在官時曾倩張少白³丈繪宦蹟四図。先大夫見背。余兄弟奉母歸里。出図遍徵名宿題詠。李君吉夫⁴。見而欣慕。慨然自任鐫刻。閱七月而功半。恭寿応官赴鄂。李君亦將赴滬。以未能蕆事為憾。爰就已刻者裝潢成冊。凡三十九幀。四図⁵曰牛山種樹。曰郡樓晚眺。曰騎驢泣亳州。曰夜渡洪沢湖。繪者張宜尊字少白。題者梅曾亮⁶。何紹基⁷。彭毓崧⁸。俞鳳翰⁹。馮晟¹⁰。熊少牧¹¹。左宗棠¹²。吳敏樹¹³。楊彝珍¹⁴。李元度¹⁵。郭嵩燾¹⁶。郭崑燾¹⁷。劉達善¹⁸。李桓¹⁹。凡十有四家。湘中名士為多。書法以何子貞為冠。題云。癸亥季秋。是其六十五歲之書。雄逸飛動。莫能與抗。左文襄書。具有豪氣。字小則不能發其筆勢。視局促作院体²⁰者。相去固已遠矣。他書亦皆可觀。郭意城題籤云。光緒辛巳初冬。當為刻成時也。

清の舒恭寿 其の父蘇橋の宦蹟四図を以て、題詠を徵集し勒石す。自跋に云う、「道光癸未(3年 1823)、先大夫は庶常を以て散館し巢県を授けらる。牧守由り監司に至り、皖(安徽省)に仕うること三十年に垂とす。官に在りし時 曾て張少白丈を倩いて宦蹟四図を絵かしむ。先大夫に背かれ、余の兄弟母を奉じて里に帰り、図を出だし遍く名宿の題詠を徵す。李君吉夫見て欣慕し、慨然として自ら鐫刻を任ず。七月を閲するも功半ばにして、恭寿は官に依じて鄂(湖北省)に赴き、李君も亦た將に滬(上海)に赴かんとす。未だ事を蔵す能わざるを以て憾みとなす。爰に已に刻するものに就きて裝潢し冊を成す。凡そ三十九幀なり。」と。四図は曰く牛山種樹、曰く郡楼晚眺、曰く騎驢涖亳州、曰く夜渡洪沢湖。絵く者は張宜尊、字は少白。題する者は梅曾亮、何紹基(1799~1873)、彭毓崧、俞鳳翰、馮晟、熊少牧、左宗棠、吳敏樹、楊彝珍、李元度、郭嵩燾、郭崑燾、劉達善、李桓。凡そ十有四家。湘中の名士を多しと為す。書法は何子貞を以て冠と為す。題に云う、「癸亥(同治2年 1863)季秋」と。是れ其の六十五歳の書。雄逸飛動にして、能く与に抗するもの莫し。左文襄(宗棠)の書は、豪気を具有するも、字小なれば則ち其の筆勢を発する能わざるも、局促して院体を作す者に視ぶれば、相去ること固より已に遠し。他の書も亦た皆な観るべし。郭意城(崑燾)の題籤に云う、「光緒辛巳(7年 1881)初冬」とは、当に刻成るの時と為すべし。

[注]

- 1 蘇橋：舒夢齡。生歿年不詳。蘇橋は号。字は錫晋。道光2年(1822)の進士。
- 2 舒恭寿：生歿年不詳。字は仲和。
- 3 張少白：名は宜尊。少白はその字。号は少白山人、小癩居士。湘南澧州の人。
- 4 李君吉夫：李吉夫。未詳。
- 5 四図：四図の名称について、郭嵩燾『養知書屋集』には「牛山種樹図」「濠州郡楼晚眺図」「騎驢赴亳州任図」「夜月渡洪湖図」とあり、羅汝懷『綠漪草堂詩集』には「牛山種樹図」「騎驢涖亳州任図」「濠州郡楼晚眺図」「月夜渡洪沢湖図」とある。
- 6 梅曾亮：1786~1856。江蘇上元(江蘇南京)の人。字を伯言。道光2年(1822)の進士。官は戸部郎中に至る。著に『柏硯山房集』があり、『柏硯山房全集』巻11の「牛山種樹図記己亥(1839)」に關係記事が見える。
- 7 何紹基：『東洲草堂詩鈔』巻25に「舒蘇橋前輩宦迹図四幅。曰濠州郡楼賞秋。曰淮平湖中捕盜。曰亳州騎驢赴任。曰居巢牛山種樹。皆張少白丈筆也。哲嗣仲和装池成冊。屬題敬成長句。時同治癸亥重陽後仲和贈菊初開也。」と見える。
- 8 彭毓崧：彭崧毓か(『清人室名別称索引』『清史稿辞典』)。1803~?。湘北江夏(湘北武漢)の人。字は于蕃。号は釋宣。道光15年(1835)の進士。
- 9 俞鳳翰：生歿年不詳。海寧の人。字は珊慶。号は少軒、石年。
- 10 馮晟：生歿年不詳。武進の人。字は日初。号は少山、銘蒼軒。
- 11 熊少牧：1794~1877。長沙の人。字は書年。号は雨臚。湘南の挙人。
- 12 左宗棠：1812~1885。湘南湘陰の人。字は季高、朴存。諡は文襄。
- 13 吳敏樹：1805~1873。巴陵(湘南岳陽)の人。字は本深。号は梓湖。道光の挙人。
- 14 楊彝珍：1807~?。武陵(湘南常德)の人。字は季涵。号は性農。道光の進士。
- 15 李元度：1821~1887。平澆(湘南平江)の人。字は次青。天岳山館。
- 16 郭嵩燾：1818~1891。湘南湘陰の人。字は伯琛。号は筠仙。道光の進士。著の『養知書屋集 詩集』に「舒仲和屬題其尊人蘇橋先生宦蹟図四冊」の記述が見える。
- 17 郭崑燾：1823~1882。湘南湘陰の人。郭嵩燾の弟。字は仲毅。号は意城。
- 18 劉達善：1825~1875。道光24年恩科順天の挙人。
- 19 李桓：1827~1891。湘南湘陰の人。字は叔虎。号は黼堂。

20 院体：館閣体のこと。法帖提要No.98「秋声賦一卷」注3参照。

(大嶋英里)